

ありやと問ひたまへば、吾姉石長姫ありと答へたまふ。皇御孫命聞き
て、吾汝に遇はんと思ふはいかに、と問ひたまへば、木花咲夜姫答へて、吾
は答へたてまつるべきことを知らず。天神の御子もし然思ひたまは
ゞ、吾父大山津見神に乞ひたまふべし、と白したまふ。皇御孫命乃ち大
山津見神に乞ひたまへり。

大山津見神天神の御子の其御女子を乞ひたまふことを聞きて、大く
歡びたまひて乃ち木花咲夜姫に石長姫を副へて百取の机代の飲食を
持たせて出したてまつりたまへり。然れども石長姫は甚醜く坐ませ
しかば、皇御孫命見畏みたまひて、送り返したまひ、美麗き木花咲夜姫を
ひとり留めたまひて一夜遇ひたまへり。

大山津見神皇御孫命の石長姫を送り返したまひしによりて大く恥
ぢて白し送りたまはく、吾女子二人並べてたてまつりし理由は石長姫

を召したまひてあらば、天神の御子の御命は雪零り風吹けども恒に石
の如く堅磐常磐に坐ませ、また木花咲夜姫を召したまひてあらば、天神
の御子の御命は恒に木花の榮ゆるが如く榮えませと言壽ぎてたてま
つれり。然るに今木花咲夜姫ひとり留めたまひて、石長姫を返したま
ひたれば、天神の御子の御壽命は木花の散るが如くもろくのみ坐させ
ん、このたまへば、石長姫もまた大く恥ぢうらみ唾き泣きして、天神の御
子もし吾を斥けず召したまひてあらば、生める兒の御壽命つねに磐石
の如く永からん。然るに唯弟のみ留めて召したまひたれば、其生める
兒必ず木花の移り落るが如く坐せさん、また顯見青人草は木花の俄に
うつるが如く衰へなん、と呪ひたまへり。

此によりて世の人の壽命は永からず。

石長姫命は伊豆國雲見山に坐ます、また木花咲夜姫命は後に駿河國

富士岳に鎮りたまへり。御父大山津見神は山の神に坐す。

無戸八尋殿

然る後に木花咲夜姫命皇御孫命の宮に出でたまひて、吾は天神の御子を孕みて、生むべき時になれり、然れども天神の御子は私に生みてまつるべきにあらずと思ひしかば、参出来つ、と申したまふ時に、皇孫命聞きて、木花咲夜姫、いかて一夜にして、妊めるぞ、汝がはらめる子は、吾子に非じ、必ず國神の子ならん、とのたまひて、木花咲夜姫命をまた返したまへり。

木花咲夜姫命遂に御子二柱を生みたまふ。御名を火照命と申し次に火折命と申し、火照命の亦の御名を火酢芹命と申し、火折命の亦の御

名を彦火々出見命と申したてまつる。

此御子生れたまふ時に、竹刀を以て御子の臍を切りたまへり。後に棄てたる竹刀終に竹林に成れり。此によりて其地を竹屋と云ふ。

木花咲夜姫命其時占へ定めたまへる田を狭名田と號け、其田の稻を以て天之甜酒を醸し、また淳浪田の稻を取りて飯を炊ぎて、御饗さしめしたまへり。

然して後に木花咲夜姫命其生みたまへる御子を抱きて皇御孫命の宮に参出来たまひて、天神の御子は私に育てたてまつるべきに非ずと思ひしかば、抱きて参出来つ、と申したまふ時に、皇御孫命其御子たちを見たまひて、あなにやし、吾皇子たちは聞善くも生れたまへり、とのたまひて嘲りたまふ。木花咲夜姫乃ち恨みて、いかに此くは嘲りたまふぞ、とのたまへば、皇御孫命答へて、心に疑はしきがゆえに嘲りたるにこそ

あれ天神の御子といへどもいかて一夜の間に人を身ましめん。まことに吾子にあらじ、必ず國神の子ならん、とのたまへり。

此によりて木花咲夜姫命ますく恨みたまひて、乃ち戸無き八尋殿を造りて、二柱の御子を抱きたてまつりて其無戸八尋殿に入りたまひて、吾生める子もし天神の胤に非ずは必ず焼く滅されん。もし實に天神の胤に坐さば必ず火も害はじ、と誓ひたまひて火を放ちて其室屋を焼きたまふ時に、其火の初に明く盛焼る時に踏健びて出てたまへる御子自ら名告りたまひて、吾は天神の御子、吾名は火照命なり、吾父の神は何處に坐ますぞ、と申したまふ。次に火炎少しく衰ふる時に踏健びて出てたまへる御子また自ら名告りたまひて、吾は天神の御子、吾名は火折命なり、吾父の神は何處に坐ますぞ、と申したまふ。然る後に木花咲夜姫命火燼の中より出てたまひて、吾生める子も吾も火の難に遇ひ

て少しも損傷はれず、皇御孫命見たまひしや、と白したまへば皇御孫命聞きて、吾もとより其吾子なりと云ふことを知れり。然れども唯一夜にして姪めるゆえに、疑ふ者あらんと思ひて、衆人に其吾子なりと云ふことを知らしめ、また天神の御子は一夜の間にも姪ませたまふことを知らしめ、また汝の世の常の者にすぐれて靈異に坐ますことを知らしめ、御子たちもまた勝れて貴く坐ますことを明さんと欲して嘲りたるにこそ他意なし、と告げたまへり。

然れども木花咲夜姫命其後も皇御孫命を恨みたまつりて共に言ひたまはず。皇御孫命これによりて憂ひたまひて歌ひたまはく、
「奥津藻菜邊にはよれども眞寢ごとも
あたはぬかよも濱津千鳥よ、」

彦火々出見命

火折命の亦の御名を彦火々出見命と申したてまつる。兄神火照命は海幸彦として海幸の釣鉤をもちて鰭の廣物鰭の狭物を捕りたまひ、火折命は山幸彦として山幸の弓矢をもちて毛の荒物毛の和物を捕りたまへり。

然るに兄神は海に出て、釣したまふ時に雨ふり風吹けば魚一つたも得たまはず、弟神は山に入りて狩したまへば雨ふり風吹けども常に獸を得たまへり。此によりて兄神妬みたまひて火折命に乞ひたまはく、「吾と汝と試みに佐知を易て用ひて見ん」とのたまひしかども、火折命許したまはず。兄神尙思ひ止みたまはず、強て三度まで乞ひたまひし

かば、火折命遂に其乞ひたまひしまに佐知を易へたまへり。

此くて兄弟各々其佐知を易へて出行きたまふ。火照命は弟神の佐知弓佐知矢を取りて山に入りて獸を求めたまへども、遂に獸の跟跡だも見たまはず、火折命は兄神の佐知鉤を持ちて海に出て、魚を釣りたまへども、また一つたも得たまはず、其釣鉤もまた海に失ひたまひて、探し求めたまへども、得求めたまはず、共に空く歸りたまへり。

此く空く歸りたまひしかば、兄神其佐知を易へて用ひたることを悔みたまひて、弟神の弓矢を返し已の釣鉤を乞ひたまひて、山佐知も已が佐知々々、海佐知も已が佐知々々、今またもとの如く各々佐知を返さん、と申したまへば、火折命答へて、「兄神の釣鉤を持ちて海に出て、魚を釣りたれども魚一つたに得ず、遂に海に失ひたり」と申したまふ。然れども兄神許したまはず、強ひて請ひたまふ。火折命乃ち新たに鉤を作り

て返したまふ。然れども兄神尙受けたまはず、其もとの釣を得んと責めたまふ。弟神思ひて遂に自ら佩きたまへる十拳劔を截りやぶりて、數千の釣鉤を作りて一つの箕に盛りて償ひたまふ。此く償ひたまひしかども、兄神尙許したまはず、怒りて責めたまひ、其釣鉤はもとの釣鉤に非ず、多くあれども受けず、とのみのたまひて、益々責めたまへり。此によりて弟神火折命甚く思ひたまひ、海邊に出て、嘆きつゝさまよひ歩きたまへば、川鴈あり、網に嬰りて困めり。彦火々出見命此川鴈の網にかゝりて困むを見たまひて、憐れと思しめして其網を解きて川鴈を放ちやりたまへり。

須臾ありて、鹽椎神出來て、彦火々出見命の思ひつゝさまよひ歩きたまふ状を見たてまつりて、空津日高乃御子は、何ゆえに此く泣き思ひたまふぞ、と問ひたてまつりしかば、彦火々出見命答へて、吾山佐知を持て

り、兄神海佐知を持ちたまへり。兄神の乞ひたまふまゝに、各々佐知を易へて用ひしかば、吾其兄神の釣鉤を海に失へり。然る後に兄神吾弓矢を返してもとの釣鉤を乞ひたまひしかば、吾新に釣鉤を作りて償へども受けたまはず、また多く鉤を作りて償ひしかども尙受けたまはず、もとの釣を得んとのみ云ひて責めたまふゆえに、せん術を知らず、此く思ひ泣くなり、と告げたまふ。

鹽椎神聞きて、然らば吾空津日高乃御子の御爲に善き議りことせん、思ひたまふこと勿れ、と云ひて、乃ち其持ちたまへる篋の中の立櫛を取りいだして地に投げたまひしかば、此櫛立どころに五百箇竹林に成れり。鹽椎神其竹林の竹を取りて、間無勝間之小船を作りて、彦火々出見命を此船に載せたてまつりて、吾この船を押流さばやしはし乗りてゆきたまふべし、よき路あらん、其路をすゝみたまは、魚鱗の如き状に

造れる宮殿あらん、其宮殿は綿津見神の宮殿なり。其海神の宮殿の御門に到りたまはゞ、其御門の外そとの井いの上に湯津楓木かづらぎあらん、其楓木かづらぎの上に登りて待ちたまふべし。此く待ちたまはゞ、其海神の御女みづかみいて、見て必ずよく議りたまはん、と教へたてまつりて、其船を押流せしかば自ら沈み行けり。

海神之宮

彦火々出見命ひこほ鹽椎神しほづゑのかみの教へたてまつりしまゝに其間無勝間之小船むかつかみにのりて少し行きたまへば果して海うみの底に可美小濱かみこはまのよき途あり。乃ち御船をすて、此濱はまのまに、進みたまへば魚鱗うろこの如きさまに造れる綿津見神の宮殿あり、其御門の外そとに井あり、其の井のほとりに湯津

楓木かづらぎあり。乃ち其湯津楓木の枝葉えだしげれる上にのぼりて待ちたまへり。

彦火々出見命ひこほ此く待ちたまふ時に、綿津見神の御女みづかみ豐玉比賣命とよたまひめのかみの從婢玉よめたまの器うつげを持ち出てきて、其井にゆきて水を酌しやくまんとす、然れども水その器うつげに満たず。奇異あやしと思ひて俯うつむして見れば、井の中の水の底に人の笑へる影かげかさまに映うつれり、乃ち仰あやむきて見れば、麗うるはしき壯夫さうと湯津楓木かづらぎの上にあり。

從婢よめたま見ていよく奇異あやしと思ふ時に、彦火々出見命ひこほ其從婢よめたまに水を乞こひたまふ。從婢乃ち乞こひたまひしまゝに水を酌しやくみて其玉の器うつげに盛りてたてまつれば、彦火々出見命ひこほ受けて其水をば飲のみたまはずして、御頸みづのくの璆たまを解ときて御口みづぐちに含くみて其玉の器うつげに唾つばき入れて、從婢よめたまに返かしたまふ。從婢受けて其璆たまを取らんとすれば、其璆たま其玉の器うつげに著つきて離はなれず。乃

ち其璵たまをつけながら玉の器を持ち返りて豊玉比賣命にたてまつりたり。

豊玉比賣命其璵たまを見て、もし門かどの外に人ありや、と從婢はしたまに問ひたまへば從婢答へて、井のほとりの湯津楓木の上に人あり、甚い麗うるはしき壯夫をとこなり。吾常わがつねは吾王わがみかのみ勝れて美うつくしと思ひたりしに、其壯夫は吾王にもまさりて甚いとたふと貴たふとく坐ます。其人吾に水を乞ひたまふ故に器に入れてたてまつりしかば、水をば飲みたまはずして、此璵たまを唾つばき入れて返したまふ。然るに其璵たま器たに著つきて離れざりしかば、著つきたるまゝに持ち歸りてたてまつれり、と云ふ。豊玉比賣命聞きて奇異あやしと思しめして出て、見たまへば從婢はしたまの云ひし如く、實まことに麗うるはしき神あり。乃ち見み感あはて彦火々出見命に遇あひたまへり。

然る後に豊玉比賣命かへり入りて其父綿津見神に白ましたまはく、吾

門かどに麗うるはしき人ひとおます、其の顔貌かほかたちいと貴たふとく、世の常の狀さまにあらず。もし天より降くだれるならば、天の垢あかあるべし、また地より來きたれるならば、地の垢あかあるべし。實まことに美うつくしく、天の垢あかなく、また地の垢あかなきは、虚空津彦そらつひこと云ふ神に坐まさんか、と告げたまふ。御父綿津見神聞きたまひて、乃ちみづから出てて見たまひて、此神は天津日高の御子虚空津日高と云ふ神なり、とのたまひて、彦火々出見命を内に引入れたてまつりて、海うみ驢うしの皮かわ八重やへを敷しき、また緇むら墨くろ八重やへを其上そのうへに敷しきて、其上そのうへに座ませたまつりて、伏ふし拜をみ仕つかへたてまつり、百取ひやくとの机代つくしろの飲物のむものを具そなへて進すすめたてまつり、然しかして後に御女豊玉比賣命に遇あはせたまつりて、天神の御子みこの此處こゝに來りたまへる理由ゆゑはいかなる理由ゆゑぞ、と問ひたまひしかば彦火々出見命具もに其兄神の失うせたる鉤かぎを乞ひて責めたまへる狀さまを語かたりて、鹽椎神しほづのの教へたてまつりしまゝに來りたまへることを告げたまへり。

綿津見命乃ち海の中の大きき小き魚どもを悉く召集へて、もし天神の御子の釣を取れるものありや、と問ひたまふ時に諸の魚ども皆知らずと答へたてまつる中に、一つの魚あり、口女久しく口の病ありて、今日來ず。喉に鯁ありて物食ひ得ずと愁ひゐたれば、必ず其釣を取りてあらん、と云ふ。乃ち口女を召し來て、其喉を探りしかば、果して失せたる鈎あり。海神其口女に、汝これより後餌を吞むこと勿れ、また天神の御子の御饌に預ること勿れ、と申しつけたまへり。此によりて後の世に至るまで口女魚を御饌にたてまつらず。

彦火々出見命此くて豊玉比賣命を妻として海神宮に留り、共に睦みて住みたまひて、すでに三年を経たる後に、樂き國なれども、遂にもこの國のことを忘れたまはず、其初のことを想起したまひて、大きなる歎息一つしたまへり。

御妻豊玉比賣命此御歎息を聞きたまひて、天神の御子此國に住みたまひて已に三年を経たれども、恒は嘆きたまふことも無かりしに、今夜倏然に大きなる嘆息一つしたまひたるは、若し何の理由にや、と其御父に告げたまへば、御父綿津見神聞きて、今日吾女の云ふことを聞けば、天神の御子此國に住みたまひて、已に三年を経たれども、恒は嘆きたまふことも無かりしに、今夜大きなる嘆息一つしたまひつと申す。天神の御子若しもの郷に還らんと欲したまひて、此く嘆きたまへるにや、と問ひたてまつりたまへば、彦火々出見命答へて、然思ひて嘆くなり、とたまふ。綿津見神聞きて、然らば還りたまふべし、とのたまひて釣鈎を取出して清洗ぎてたてまつりたまへり。

然る時に綿津見神また彦火々出見命に申したまはく、天神の御子の吾國に來たまへる欣いつか忘れん。此より後八重の隈路遠く隔ると

も、皇御孫命時々想起したまひて忘れたまふこと勿れ、とのたまひて、乃ち悉く海の中の鰐どもを召しあつめて、今天津日高の御子虚空津日高また上國に還りたまはんとす。誰は幾日に送りたてまつりて、返事白さんや、と問ひたまへば、魚ども各々其身の長さ短さのまゝに送りたてまつらん日を限りて答へたてまつる中に、一尋和邇と云ふ鰐あり、吾は一日の中に天神の御子を送りたてまつりて歸らん、と云ふ。海神聞きて、然らば汝送りたてまつれ、海の中を渡る時に慎みて天神の御子を驚かしたてまつること勿れ、と教へたまひて、彦火々出見命を其鰐の頸に載せて送り出したてまつりたまへり。

彦火々出見命乃ち其鰐の頸に乗りて出てたまへば、其鰐果して云ひしが如く一日の中に送りたてまつれり。其鰐の歸らんとする時に、彦火々出見命御腰に佩きたまへる紐小刀を解きて其鰐の頸に掛けて返

したまへり。後に佐比持神と申したてまつるは此一尋和邇なり。

潮満珠潮乾珠

彦火々出見命海神の宮より歸りたまはんとする時に、綿津見神釣鉤を取出して清洗ぎてたてまつり、また潮満珠潮乾珠二顆の珠を其釣鉤に副へてたてまつりて、彦火々出見命に教へたまはく、此釣鉤を兄神に返したまふ時に陰に、此釣鉤は貧釣、須釣、須釣、宇流釣ぞと呪咀して、三たび唾吐して後方に投げて返したまふべし、向ひて返したてまつりたまふ可らず。また此二つの珠を用ひたまはん状は、兄神もし高田を作りましたまは、御神は窪田を作りたまふべし。兄神もし窪田を作りたまは、御神は高田を作りたまふべし。此くしたまは、吾水を治めてあ

れば三年の間に兄神必ず貧くなりたまはん。此くて兄神其貧くなり
たまひたるによりて御神を恨みて攻めきて戦ひたまは、潮満珠を取
出して漬したまふべし。潮必ず満ちきて兄神溺れ苦みたまはん。兄
神もし悔みて愁ひたまは、潮乾珠を取出して漬したまふべし。潮お
のづから乾て、兄神生返りたまはん。また兄神海に出て、釣したまは
、御神海濱に出てまして風招をして嘯きたまふべし。吾奥津風邊津
風を起し奔波を立て、兄神を惱したてまつらん。此くして苦め惱し
たてまつりたまは、兄神おのづから従ひたまはん、と教へたてまつり
たまへり。

彦火々出見命其珠と鈎とを受けて歸りたまひて後に、先づ其鈎を兄
神に返したまへり。然れども海神の教へたまひしまゝに、呪咀して唾
して後方に投げて返したまひしかば、其より後兄神日に日に貧くなり

たまへり。

此によりて兄神弟神を恨みて悪き心を起して責めきて戦ひたまふ。
彦火々出見命乃ち海神の教へたまひしまゝに潮満珠を取出して漬し
たまへば潮忽ちに満ちきて兄神溺れたまふ。兄神苦みて、吾奴僕とな
りて汝に仕へたてまつらん、救ひ活したまへ、と云ひて愁ひたまふ。彦
火々出見命乃ち潮乾珠を取出して漬したまへば、潮おのづから乾て兄
神活きたまへり。

然れども兄神其弟神に請ひて奴僕となりて仕へんと白したまひし
ことを忽ちに忘れたまひて、また荒き心を起し、吾は汝の兄なり、いかで
兄として弟に仕へんや、とのたまひて争ひたまふ。彦火々出見命乃ち
また其潮満珠を取出したまふ。兄神見て急ぎ逃れて高山に登りたま
へば、潮また山にのぼり、高樹に攀りたまへば、潮また樹にのぼる。兄神

すてに逃れたまふべき途なくて苦みたまへば、彦火々出見命乃ち潮乾珠を取出して救ひたまふ。火照命また釣せんと思ひて海邊に出てたまへば、彦火々出見命また出てゆきて風招して嘯きたまふ。此く嘯きたまへば、忽ちに奥津風邊津風起り奔波立ちて、兄神溺れくるしみて活くべき途を知りたまはず、遂に弟神を呼びて、汝久しく海原に居たまひたれば必ず善術知りたまふべし。もし吾を救ひ活したまはゞ、今より後吾生兒の八十連屬うち續きて、汝が宮の御垣邊を離れず、晝夜の守護人となり、狗人となりて仕へたてまつらん」と白したもふ。此く請ひたまひしかば、彦火々出見命また潮乾珠を取出して兄神を救ひたまへり。兄神火照命此によりて弟神彦火々出見命の勝れて貴き神に坐ますことを知りたまひて、従ひ仕へたてまつらんと欲したまへども、彦火々出見命尙御心解けたまはず、共に物言ひたまふことなかりしかば、兄神

愈々憂ひたまひて彦火々出見命の御心を和げたてまつらん爲に、御腰に積鼻禪を著け、また赤土を御面と御掌中に塗りたまひて、吾は此く身を汚して永久に汝が俳優者となりて仕へたてまつらん」と白したまひて、乃ち足を舉げて踏行きつゝ、溺れ苦みたまひし時の状を學し、潮のはじめて足を漬せる時は足占をなし、膝に至りし時は足を舉げ、股に至りし時は走り廻り、腰に至りし時は腰を捫り、腋に至りし時は胸に手を置き、頸に至りし時は手を舉げ、此く種々の状して慰めたてまつりしかば、彦火々出見命遂に御心解けて兄神を許したまへり。此によりて後の世に至るまで火照命の御裔の隼人どもは皇御孫命の御宮牆邊を離れず、吠る狗に代りて、其溺れし時の種々の態して仕へたてまつるなり。

豊玉比賣命

彦火々出見命海宮より歸りたまはんとする時に、豊玉比賣命告げたまはく、吾はすでに姪めり、然れども天神の御子を海の中に産みたてまつる可きにあらず、此によりて産むべき時になりなば愛しき御君の國に到らん。風濤急峻からん日に海濱に産殿を造りて待ちたまふべし、と教へたてまつりたまへり。

彦火々出見命乃ち豊玉比賣命の乞ひたまひしまゝに、鵜羽を葺草にして産殿を作りて待ちたまへり。此産殿の薨いまだ葺き合へたまはね時に、豊玉比賣命大きなる龜に馭りて海原を照し風波を凌ぎて出たまひ、すでに産みたまふべき時になりしかば、御腹堪へがたく成りた

まひて、産殿の薨葺合ふを待ちかねて其産殿に入りたまへり。

此くて、御子産まんとしたまふ時に、豊玉比賣命其夫彦火々出見命に告げたまはく、凡て他國の者は臨産時になれば元の國の形になりて産むなり。然れば吾も今もとの身になりて産まんとす。吾を見たまふべからず、と申したまふ。彦火々出見命その言を奇しと思しめして、豊比賣命のまささに産みたまふ時に、竊に伺きたまへば、豊玉比賣命八尋和邇に化りて腹這ひたまへり。乃ち驚き畏れて遁退きたまへり。

豊玉比賣命其伺きたまひしことを知りたまひて、御心に甚恥かしと思しめして、吾恒は海路遠く渡りて行通はんと思ひしかども、吾言を聞きたまはず、吾形を伺見たまひしことの甚恥かしくあれば、また通はじ吾奴婢ども若し此國に到らば放還したまふこと勿れ、御國の奴婢ども若し吾國に來らばまた返さじ、とのたまひて、其生みたまひし御子を眞

床覆衾と草に褻みて波限に生置きて海に入りたまへり。

豊玉比賣命の歸りたまはんとする時に、彦火々出見命出でたまひて、此御子の名は何とつけん、と問ひたまへば、豊玉比賣命答へて、波限に建てし産殿の鶺鴒草いまだ葺き合へぬに生れたまひたれば、日子波限建鶺鴒草葺不合命と號けたてまつりたまふべし、と白したまふ。此く白したまひて乃ち海阪途を塞ぎて徑に海原にかくれ入りたまへり。此くて海原の途永久に塞りたれども、豊玉比賣命尙彦火々出見命の御事を忘れたまはず、産殿を伺きたまひしことを恨みたてまつりつゝ、も尙愛しと思ふ御心堪へがたく、御子を育てたつまつらん爲に、其妹玉依比賣命をたてまつり、此玉依比賣命に附けて御歌をたてまつりたまへり。

赤玉は緒さへひかれど白玉の

君がよそひし貴くありけり、

彦火々出見命乃ち答へて歌ひたまはく、

奥津島嶋どく島に吾ぬねし

妹は忘れじ世のことくくに、

鶺鴒草葺不合命

天津日高日子波限建鶺鴒草葺不合命生れたまふ時に大綿津見神の御末天之忍人命仕へたてまつりて箒を作りて蟹を掃ひ、また鋪設をつかさどりしかば遂に職の名を蟹守と賜はれり。後の世の掃部連は其裔なり。

彦火々出見命また此御子を育てたまはん爲に他の婦人の乳を取り、

たまひ、乳母湯母飯嚼湯坐を定め、諸の部を定めて育てたてまつらしめ
たまへり。此は後の世の乳母のはじめなり。

此くて後に彦火々出見命かくれたまひ、御子鶉葺草葺不合命その御
姨玉依比賣命に遇ひたまひて御子五瀬命を生みたまひ、次に稻氷命を
生みたまひ、次に御毛沼命を生みたまひ、次に若御毛沼命を生みたまふ。
若御毛沼命の亦の御名を豊御毛沼命と申したてまつる。豊御毛沼命
は後に大倭に遷りて天下治しめしたまひしによりて、神大倭磐彦命と
申したてまつる。後の世に神武天皇と申したてまつるは此神なり。
御毛沼命は後に常世國に渡りたまひ、稻氷命は御妣の國に行きたま
はんとして海原に入りたまへり。

秋津洲の巻

五瀬命若御毛沼命

天津日高日子波限建鶉葺草葺不合命かくれたまひて後に御子五瀬
命若御毛沼命二柱の神高千穂の宮に坐まして天下治しめしたまひ、御
兄弟稻氷命御毛沼命また諸の御子たち共に従ひ助けたてまつりたま
へり。

然して後に若御毛沼命其兄神たちまた諸の御子たちと議りてのた
まはく、むかし吾天祖高皇產靈命高天原に坐まして天神天照大御神の
さとしたまひしましに、此豊葦原乃千秋乃長五百秋乃瑞穂國は皇御孫
命の治しめしたまふべき國なりとのたまひて、吾遠祖彦火邇々藝命を

天降したまへり。彦火邇々襲命乃ち天神の教へたまひしまゝに天之
岩戸を押開き天之八重雲を押別けて高千穂の峯に天降りたまひ、天津
日嗣の彌つぎくに此西國を治しめしたまひて、已に多く年を経たり。
此く多く年を経たれども遠き國は未だ従ひたてまつらず、遂に邑毎に
君あり村毎に長あり各々疆を分けて争へり。然れば今より後何れの
地に宮を造りて天下平らけく安らけく治しめさん。鹽土老翁の白す
を聞けば東の方に美しき國あり、青垣山を廻らして良き國なり、其國の
中に天の磐楯船に乗りて高天原より天降りせし神ありと白す。此國
は、必ず大宮地造るべき國なり、また其天降りせし神は饒速日命ならん。
其國に往きて天下安らけく治しめさんと思ふはいかに、とのたまへば、
諸の御子たち聞きて皆然したまふべし、従ひたてまつらんと答へたま
へり。

五瀬命若御毛沼命二柱の神乃ち諸の御子たちを率ゐて、日向國を出
てたまひ海路より東の方をさして進みたまひて、速吸之門に到りたま
ふ時に一人の漁夫あり、舟に乗りて出てたり。若御毛沼命其漁人を召
したまひて汝は誰ぞと問ひたまへば、其漁人答へて、吾は國神なり、吾名
は珍彦と云ふ、また吾來れるゆえは吾曲浦に釣してありし時に、天神の
御子來たまふと聞きしかば、迎へたてまつらんと思ひて來れるなり、と
云ふ。若御毛沼命また汝よく吾を導かんやと問ひたまへば、其漁人答
へて、可畏し、導きたてまつらんと白す。若御毛沼命乃ち椎棹の端をさ
し渡して其漁人を御舟に引入れて、海路の導者としたまひて、椎根津彦
と云ふ名を賜ひて、仕へたてまつらしめたまへり。椎根津彦は倭の國
造の祖なり。

此くて筑紫國の宇佐に到りたまひし時に、其國に宇佐津彦宇佐津媛

と云ふ者あり、天神の御子たちの御爲に一柱騰宮を造りて大御獲たてまつれり。若御毛沼命乃ち其宇佐津媛を御従として仕へたてまつれる天之種子命に賜ひて妻になしたまへり。此天之種子命は中臣連の祖なり。

此くて後に五瀬命若御毛沼命二柱の神筑紫の國の岡水門に到りたまひ、其ところより安藝國の埃宮に遷りたまひ、其ところよりまた吉備國に遷りたまひ、其國の高島の宮に三年經るまで留りたまひて、舟を備へ糧を整へて軍の謀略したまへり。

長髓彦

若御毛沼命吉備の高島宮に御兄五瀬命と共に三年經るまで留りた

まひて軍の謀略のこることなくしたまひし後に、此國を出てたまひ、御軍の船の舳打つゞけて難波の埼に到りたまふ時に、其ところの潮波甚急く御舟苦めり。此によりて其國を浪速國と云ふ、後に難波といふ。然して後に河より溯りて河内國草香邑の青雲白肩之津に到りつきたまひて、軍を整へて龍田に進まんとしたまひしかど、其ところの路狭嶮くして軍兵並び行くことを得ず、乃ち還りたまひて、更に東の方より膽駒山を踰へて青垣山を巡らせる中洲に進み入りたまはんとする時に、其青垣山の内に長髓彦といふ者あり、天神の御子の御軍の近づくを見て、天神の御子たちの來たまふこと必ず善き御心にあらじ、吾國を奪はんと欲して此く軍を率ゐて進み來たまふにこそ、と云ひて、乃ち悉く從へる軍兵を起して天神の御子の御軍を孔舍衙の坂に迎へて防ぎたてまつらんとす。

乃ち共に戦ひたまふ時に五瀬命御手に長髓彦が痛矢串を受けたまひて、天神の御子の御軍進むこと能はず。五瀬命此によりて甚く愛ひたまひて、吾は天照します日の御神の御子として、日に向ひて戦ふこと良からず、今より退きて弱きを示し、日を背負ひて影のまに、戦はん。此くして虜を征たば必ず虜のづから滅びなん、とのたまひて、若御毛沼命と共に御軍を引きて退き還りたまふ時に、長髓彦が軍また進まず。五瀬命遂に草香津に到りて、御盾を植て、嘆きたまひ南の方より廻りて血沼の海に到りて御手の血を洗ひたまへり。其ところより更に紀國の男之水門に到りたまふ時に御手の痛み堪へがたし。五瀬命乃ち御劔の柄を取握みて、悲きかも大丈夫にして、賤奴が痛手を負ひて報はずして今死なんとす、とのたまひて男健びして死にたまへり。此によりて此水門を男之水門と云ふ。

高倉下

五瀬命長髓彦が痛手を負ひて遂に死にたまひし後に、若御毛沼命兄弟たちまた御子たちと共に皇軍を率ゐて名草邑に到り名草戸畔と云ふ者を滅したまひ、遂に狭野を越へて熊野に到り、天之磐盾山に登りたまひ、然して後に御軍を引きて漸々に進みたまふ時に海の中にて忽ちに暴風起り御舟たゞよへり。

稻氷命乃ち歎きたまひて、吾祖は天神なり、吾母は海神なり、何故に此く吾を陸に苦めまた此く吾を海に厄めたまふぞ、とのたまひて、劔を抜きて海の中に入りたまふ時に御毛沼命もまた恨みたまひて、吾母と姨と共に海神に坐ます、何故に此く浪を起て、溺らさんとはしたまふぞ、とのたまひて乃ち浪の穂を踏みて常世國に渡りたまへり。

稻氷命御毛沼命二柱の神かく去りたまひしかば、若御毛沼命ひとり留りたまひて御子手研耳命と共に御軍を率ゐて進みたまひ、熊野の荒坂津に到りて丹敷戸畔と云ふ者を滅したまへり。

然して後に熊野村に到りたまふ時に、大きな熊其ところの山より走りいて、又忽ちに隠れたり。熊野の山の荒振神若御毛沼命の御軍を害はんと欲して此く熊に化りて出て、天神の御子を迷はしたてまつらん爲に毒氣を吐さしかば、若御毛沼命忽ちに其神氣に中りて痺えたまひ御軍の人ども、皆悉く痺えて病臥したり。此によりて皇軍振はず、荒振神のみ勢を得たり。

此時に熊野の高倉下と云ふ者あり、横刀を持ちて天神の御子の病伏したまへるところに到りて獻れり。此くたてまつりしかば、若御毛沼命忽ちに寤起きたまひて、長く寝たるかな、とのたまへり。此くのたま

ひて其横刀を受取りたまへば、熊野の山の荒振神おのづから皆切仆されて病伏せる御軍人ども悉く寤起きたり。

茲に若御毛沼命其横刀を得たるゆえを高倉下に問ひたまへば、高倉下答へて、「吾夢に天照大御神高皇産靈尊二柱の神健御雷命を召したまひて豊葦原の瑞穂國は今甚く騷擾ぎて荒振神多く起りて、吾御子の御軍を防ぎたてまつり御子たち安からず惱みたまへり。其葦原乃國は専ら汝が平定しづめたる國なれば、汝健御雷命今また疾く天降りして荒振神どもを撥ひしづめて吾御子を助けたてまつりたまふべし」とさとしたまふ時に健御雷命答へて、「吾くならずとも、専ら其國を平定けし横刀あれば此横刀を降しまつらん。其降しまつらん狀は高倉下が倉の頂を穿ちて其ところより墮し入れんと、白したまひて、健御雷命吾に告げたまはく、汝が倉の頂を穿ちて、此横刀を墮し入れん。汝朝目吉く

取持ちて天神の御子にたてまつれ、と教へたまへり。乃ち教へたまひしましに夜明けて己が倉を見しかば、果して横刀あり、乃ち取持ちて擽げたてまつりたるにこそ、と白したてまつれり

此横刀の名を佐士布都神と申し、亦の名を豊布都神と申し、また布都御霊とも申したてまつる。後に石上の神宮に納めて祭りたまへり。

八咫鳥

若御毛沼命熊野の山の荒振神を滅したまひて後に、御軍を率ゐてまゐり進みたまはんとする時に、天照大御神高皇産靈尊二柱の神皇御孫命の御夢にさとしたまはく、天神の御子は此より奥に進み入りたまふべからず、荒振神いと多し。然れば今八咫鳥を天降しつかはさん、其八咫

鳥皇師を導きたてまつらん、其飛行かん後より進みたまふべし、と教へたまへり。

此く教へたまひしかば、果して八咫鳥あり、空より飛降り。若御毛沼命見たまひて、此鳥の飛來ること眞に祥夢にかなへり、天照し坐す大御神吾を助けたまふなり、とのたまひて、更に進みたまふ時に、大伴連の祖日臣命大久米を率ゐて御軍の先に立ちたてまつりて、山を踏み途をひらきつゝ、八咫鳥の飛びゆくまゝに追ひゆけば、遂に宇陀に出でたまへり。日臣命此く導びたてまつりしかば、若御毛沼命其功績を賞めたまひて道臣命と云ふ名を授けたまへり。

此八咫鳥は後に山城國加茂の社に鎮りたまふ加茂建角身命なり。

此神はじめに高天原より日向國の高千穂の峯に天降りしたまひ、若御毛沼命の熊野より進みたまふ時に、天照大御神のさとしたまひしまし

に、八咫鳥に化りて皇御孫命の御軍を導きたまひ、然して後に大和國の葛木山に留りたまひ、其後にまた葛木山より遷りて、山城國岡田の加茂に到り、山城川に副ひて下りつゝ、葛野川と賀茂川と會ふところに到りて遙に賀茂川を見たまひて、此河は狭き小き河なれども、石河の清き河なり、とのたまへり。此くのたまひしによりて、此河を瀬見小河と云ふ。其後にまた建角身命此河より上りて、久我の北の山本に鎮りたまへり。其時より賀茂神社と云ふ。

賀茂建角身命丹波國神野に坐す伊賀古夜比賣命に遇ひて、御子玉依比古命を生みたまひ、次に玉依比賣命を生みたまへり。此玉依比賣命石河の瀬見小河のほとりに出て、遊びたまふ時に、丹塗矢一つ河上より流れ下れり。玉依比賣命其丹塗矢を取りて持歸りて床の邊に挿置きたまひしかば、遂にものづから姪みて男子を生みたまへり。此御

子人と成りたまふ時に、御祖父建角身命八尋殿を作り、其殿の八つの戸扉を堅め、八鹽折酒を醸して、神々たちを多く集へて七日七夜遊び壽きたまへり。其時に建角身命此御子を抱きたまひて、汝が父と思はん人に此酒を飲ましめたまふべし、とのたまひて、酒杯を取らせたまひしかば、御子乃ち酒杯を舉げて天に向ひて祭をしたまひて、忽ちに屋の甍を破りて天に昇りたまへり。

此く甍を分け破りたまひしによりて、外祖父の御名を取りて、此神を賀茂別雷命と申したてまつる。また其丹塗矢に化りて流れくだりたまひしは、乙訓に坐します火雷命なり。

兄宇迦斯弟宇迦斯

若御毛沼命八咫鳥の導きたてまつるまゝに進みて、宇陀に到りたまへば、其ところに兄宇迦斯弟宇迦斯二人あり、共に宇陀縣の魁師なり。若御毛沼命先づ八咫鳥を遣したまひて、今天神の御子來たまへり、汝等仕へたてまつらんや、と其二人に問はしたまふ時に、兄宇迦斯鳴鏑矢を以て其御使を待射て射返したり。此兄宇迦斯邪惡き心あり、天神の御子の御軍を待撃たんと思ひはかりて、軍人を集めしかども、聚め得ざりしかば、乃ち欺きて害ひたてまつらんと計りて、大殿を造りて其殿の内に押機を張りて待てり。

其時に弟宇迦斯一人進み出て、吾兄兄宇迦斯邪惡き心あり、天神の御子の御使者を射返したてまつり、また御饗たてまつらんと欺きて害ひたてまつらんと計りて、假に新宮殿を作り立て、其殿の内に押機を張りて待てり、此によりて疾く其詐術を知りて備をなしたまはん爲に、急

ぎ参りて告げたてまつるなり、と白せしかば、若御毛沼命聞きて、乃ち遣臣命大久米命二人を遣して其叛きたてまつる状を探らしめたまふ。道臣命大久米命乃ち行き見て見れば、果して弟宇迦斯が告げたてまつりしが如く、殿を作りて押機を設けたり。此によりて兄宇迦斯が邪惡き心ありと云ふことを知りて、兄宇迦斯を召して、汝が作りて仕へたてまつる殿の内には、汝賤き奴まづ入りて、其仕へたてまつらんとする状を明したてまつれ、と罵りて、横刀の柄取握み、矛とり矢さして進入れしかば、兄宇迦斯追入れられて、己が張置ける押機に打たれて死にたり。乃ち其屍を引出して斬散りしかば、流るゝ血地に溢れたり。此によりて其ところを宇陀乃血原と云ふ。

此くて後に、弟宇迦斯大御饗をたてまつれり。若御毛沼命其大御饗をば悉く其御軍人どもに分ち與へたまへり。

其時歌ひたまはく、

「宇陀のたかきに鳴瀬張る、

わが待つや鳴は障らず、

機細し鯨さやる、

前妻が魚乞はさば、

立椏の實の無けくを扱しひえね、

後妻が魚乞はさば、

最榮樹の實の多けくを扱しひえね、

此御歌は來目歌なり

此くて後に、若御毛沼命吉野の地を省んと思しめして、宇陀の穿邑より、巡り出てたまふ時に、井の中より人出てたり、光りて尾あり。若御毛沼命其人を見て、「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、其人答へて、「吾は國神なり、吾

名を井光と云ふ」と云ふ。また少し進みたまへば、尾ある人あり、磐石を排けて出てたり。若御毛沼命其人を見て、「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、其人答へて、「吾は國神なり、吾名を磐排別之子と云ふ」と云ふ。また少し進みたまへば、吉野の河に梁をうちて魚取る人あり、「汝は誰ぞ」と問ひたまへば、「吾は國神なり、吾名は贊持之子と云ふ、天神の御子出てたまふと聞きし故に、迎へたてまつらんと思ひて出て來れり」と答へたてまつれり。然して後に、若御毛沼命宇陀の高倉山に登りたまへり。

八十梟帥

若御毛沼命宇陀の高倉山の嶺に登りて遙に見たまへば、國見山の上
に八十梟帥あり、また兄磯城が軍あり、磐余の邑に布滿てり。其賊虜ど

もの居るところ皆要害のところなり、此によりて道路絶えふさがりて、
近づくこと難し。若御毛沼命甚く患ひたまひて、天神の御心を乞ひた
まへる夜の御夢に、天照大御神高皇産靈尊現はれて、皇御孫命に教へた
まはく、皇御孫命其賊虜を滅さんと願ひたまはく、天之香山の社の中の
土を取りて、天之八十平瓮を造り、また殿瓮を造りて、八百萬の神たちを
天社國社と遺ることなく祭りたまひて、稜威乃呪咀と祈りたまふべし、
此く祭りて祈りたまはく、賊虜必ずおのづから従ひ滅びなん、と誨した
まへり。

若御毛沼命乃ち天神の教へさとしたまひしまゝに諸のことを遺る
ことなく取行はんとしたまふ時に、弟宇迦斯また参り出て、倭國の磯
城の邑に磯城乃八十梟帥あり、また高尾張の邑に赤銅乃八十梟帥あり、
共に天神の御子の御軍を待防ぎて防戦はんと欲す。皇御孫命もし其

賊虜を滅さんと欲したまはく、先づ天之香山の塩土を取りて、天之八十
平瓮を造り、天社國社の神たちを祭りたまひて、然して後に其賊虜を撃
ちたまふべし、必ず容易く滅されなん、と告げたてまつれり。若御毛沼
命聞きて、吾すてに吉き夢を見たり、今汝が自すこと、また吉き夢の兆に
合へり、とのたまひて、大く歡びたまひて、乃ち椎根津彦に弊れたる衣服
蓑笠を著せて、老父の貌につくらせ、また弟宇迦斯に箕を被りて老嫗の
姿につくらせて、汝たち二人天之香山に行きて、潜に其巖の土を取りて
來り還れ、とのたまひて出しやりたまへり。

椎根津彦弟宇迦斯二人皇御孫命の教へたまひしまゝに出で行く時
に、賊虜の軍兵ども路に充滿ちて通ふこと難し。椎根津彦乃ち祈りて、
「皇御孫命もし賊虜を滅して此國を平定鎮めたまはんこと幸あらば、行
かん路おのづから通れ、もし幸なくば賊虜必ず防禦がんと云ひ訖りて

たゞちに進みゆく時に賊虜ども二人を見て大きく咲ひて、あな醜めしこめき老父老嫗」と言ひて相共に道を避けて二人を行かしめしかば、二人遂に天之香山に到りつきて、其山の土を取りて歸りて若御毛沼命にたてまつれり。

若御毛沼命乃ち此埴土を以て天之八十平瓮を作り、また天之手抉之八十殿瓮を作りたまひて、丹生の川上に上りて天神地祇と祝ひたてまつりて諸の神たちを遣ることなく祭りたまへり。

此く祭りたまふ時に、若御毛沼命祈りたまはく、吾今八十平瓮を用ひて、水無くして飴を作らんとす、飴もし成らば、吾必ず矛劔の力を假らずして天下を平定けん、とのたまひて飴を作りたまへば、飴のづから成れり。若御毛沼命また、吾今殿瓮を丹生川の水底に沈めん、若し川の中の魚大きなるも小さきも悉く酔ひて流れんこと、披葉の浮きて流るゝが

如くあらば、吾必ず此國を定めん、若し然らずば、吾願へること必ず幸あらじ、と祈りたまひて、乃ち殿瓮を川を沈めしめたまふ時に、忽ちに川の魚悉く浮出て、水のまに／＼唼喝へり。椎根津彦見てかく告げたまつりしかば、若御毛沼命大く喜びたまひて、丹生川の川上の五百箇乃真坂樹を根抜に抜じて、諸の神を祭りたまへり。殿瓮を置きて神を祭ることとは、此時より始れり。

其時に高皇産靈尊の教へたまひしまゝに、若御毛沼命みづから天神を祭りたまひ、道臣命を齊主として、殿媛と云ふ名を授けたまへり。また其置ける埴瓮を殿瓮とし、火の名の殿迦久土とし、水の名を殿罔象女とし、食物の名を殿稻魂女とし、薪の名を殿山椎とし、草の名を殿野椎とし、此く定めて取行ひたまへり。

然して後に若御毛沼命其殿瓮の御食物をさこしめしたまひて、御軍

をとゝのへて進出でたまひて、先づ八十梟帥を國見山に撃ちて斬りたまへり。若御毛沼命此八十梟帥を撃ちたまふ時に、御心に必ず勝たんと思しめしたまひて、國見山を大石に喩へて、歌ひたまはく、

神風の伊勢の海の

大石にや伊蔓回ほる

細螺の細螺の吾子よ吾子よ伊蔓回ほる

打てしやまむ、

八十梟帥すてに滅ひたれども、其餘の賊虜尚多くありて、未だ天神の御子に従ひたてまつらず、國の中甚亂れたり。若御毛沼命此によりて御心に思ひたまひて、乃ち道臣命を召して、疾く大來目部を率ゐて大室屋を忍坂の邑に作りて、其賊虜に御饗を賜ひて、欺きて打取れ、とのたまひしかば、道臣命乃ち其密にさとしたまひしまゝに、室屋を坂に堀りて、

御饗賜ふと詐りて、賊虜を欺き招きて、皇師の猛き軍兵どもと賊虜と交りて其室屋に入らしめて、乃ち其軍兵どもと陰に約りて、賊虜ども御饗賜はりて、酒に酔ひたる時に、吾起ちて歌はん。汝等吾歌ふ聲を聞かば、忽ちに起ちて劍を抜き、一時に賊虜を刺せ、と教へて酒宴したまふ。賊虜ども此く陰に謀りたまへることを知らず、心のまゝに酒飲みて、悉く酔ひたる時に、道臣命忽ち起ちて歌ひたまはく、

忍坂の大室屋に

人多に入り居りとも、

人多に來入りをりとも、

みつゝし來目之子等が、

頭槌石槌もち打ちてしやまむ、

此く歌ひたまふ時に、軍兵ども共に其頭椎劍を抜き、もろともに賊

虜を殺せしかば、悉く殺されて遺ることなく死にたり。皇軍の者ども
大く悦びて、歌ひまた晒へり。

今はよ今はよ、

あしやを、

今たにも吾子よ今たにも吾子よ、

此く晒ひ歌ひて後に、また歌へり。

「蝦夷を一人百之人

人は云へども手向ひもせず、

然れども若御毛沼命尙御心やすからず、戦に勝ちて驕ること善から
ず。今大きなる賊虜すてに滅びたれども、尙其残りの黨興多く群れり。
然れば久しく一處に留りてあらば、必ず危からん、このたまひて、其とこ
ろより遷りたまへり。

此くて後に若御毛沼命皇師を悉く卒ゐて、磯城彦を撃たんと思しめ
して、使者を遣して先づ兄磯城を召したまふ。然れども兄磯城邪惡さ
心あり、天神の御子の命に従ひたてまつらず。若御毛沼命更に八咫鳥
を遣して、兄磯城を召したまふ。八咫鳥乃ち教へたまひしまゝに、兄磯
城が營に到りて、天神の御子汝を召したまふ、いさわいさわと鳴きしか
ば、兄磯城怒りて、天壓神の攻め來りたまへるによりて、吾心すてに安か
らず、憂ひをる時に、いかに鳥の此く惡き聲して鳴くぞ、と云ひて、乃ち弓
を引きて矢放つ。然れども其矢中らず。八咫鳥飛避りて、弟磯城が家
に到りてまた、天神の御子汝を召したまふ、いさわいさわと鳴きしかば、
弟磯城聞きて畏みて、天壓神の攻め來りたまへるによりて、吾心日夜安
からず、畏みをる時に、鳥の此く鳴くこと甚善し、と云ひて、乃ち葉盤八枚
を作りて、食物を備へて御饗して、其鳥の教へしまゝに急ぎ参りて、吾兄

兄磯城邪惡き心あり、天神の御子來りたまふを聞きて、仕へたてまつらんとはせず、待ち撃ちたてまつらんと謀りて、八十梟師を聚めて、兵甲を具へて、相戦はんとす。天神の御子疾く謀りたまふべし、と告げたてまつれり。

若御毛沼命乃ち諸の將軍を聚めて議りたまひて、今兄磯城果して邪惡き心あり、召せども來ず、如何にせば善からん、と問ひたまへば、諸の軍將共に答へて、兄磯城は邪惡き心あり、然れば先づ弟磯城を遣して、曉諭さしめたまふべし、また兄倉下弟倉下をも共に説さしめたまふべし。此くさとしたまひて尙邪惡き心あり、從ひたてまつらずは軍を起して撃ちたまふべし、と白したまふ。乃ち白したてまつりたまふに、弟磯城を遣して説さしめたまひしかども、兄磯城ども尙愚なる謀計を守りて、天神の御子の大神に從ひたてまつらんとせず。其時に椎根津彦議り

ていはく、今先づ吾女軍を忍坂の道より出して戦はしめん、賊虜必ず悉く其強き軍兵を出して防ぎ戦はん。然る時に我男軍を出して直ちに馳せて墨坂に到り、菟田川の水を取りて、其坂の炭火に灌ぎて坂を越えて賊虜を驚かさしめば、賊虜必ず破れなん、と白す。若御毛沼命聞きて其謀計を善めたまひ、乃ち其白せしまゝに、先づ女軍を出して戦はしめたまふ。

兄磯城ども悉く軍兵を聚めて防ぎ戦ひしかども、勝たず、天神の御子の軍疲勞れたり。若御毛沼命其時軍兵どもの心を休めたまはんとして歌ひたまはく、

「楯並めて伊那佐の山の

樹間ゆも行き守らひ

たゝかへば吾はや飢ぬ、

島津鳥鶴飼が徒今助けに来ぬ、

此く歌ひて皇師を激勵したまひて、然る後に男軍を出して、墨坂を越えて、後方より夾撃せしめたまひしかば、賊虜悉く破れて、其鳥帥兄磯城ども皆殺されて滅びたり。

可美眞手命

若御毛沼命すてに八十鳥帥を滅したまひ、また磯城産どもを滅したまひて後に、更に御軍を整へて長髓彦を撃ちたまふ。然れども長髓彦が軍つよく、皇御孫命連りに戦ひたまへども、勝ちたまふこと能はず、苦みたまふ時に、忽ちに大空暗くなりて雨降り、金色の神靈き鷄あり、空より飛降り來て、皇御孫命の御弓の弦に止れり。其鷄光りかどやきて狀

流電の如くありしかば、長髓彦が軍卒これによりて皆眼眩みて力め戦ふこと能はず、甚く困めり。

長髓彦はじめ孔舍衝の坂に天神の御子の御軍を待撃ちて防ぎたてまつりし時に、若御毛沼命の御兄五瀬命長髓彦が矢に御腕を貫かれたまひて、其矢串の痛みに堪えず、遂に男之水門に到りて死にたまへり。此によりて若御毛沼命常に御心に恨みたまひて、夜盡に忘れたまはず。今また長髓彦と戦ひたまふ時に、御心に必ず長髓彦を殺して其軍を悉く滅さんと願ひたまひて歌ひたまはく

「みつくし來目之子等が

粟生には韭ひと莖

其が根莖其根芽つなぎて撃ちてしやまじ、

又歌ひたまはく、

「みつくし來目之子等が

垣本に植えし葦

口ひびく吾は忘れじ撃ちてしやまじ、

此く歌ひたまひて、軍卒をはげましたまひて、攻めたまへり。

若御毛沼命此く攻め戦ひたまふ時に、長髓彦使者を皇御孫命の御許に遣して問はしめたてまつらく、むかし天神の御子天之磐楯船に乗りて、高天原より此國に天降りしたまへり。此神の御名を櫛玉饒速日命と申したてまつる。此饒速日命天降りしたまひて後に、吾妹御炊屋媛に遇ひたまひて、御子可美真手命を生みたまへり。吾此によりて國神として天神の御子饒速日命に仕へたてまつり、饒速日命かくれたまひて後に御子可美真手命を君として今に至るまで仕へたてまつれり。天神の御子いかて兩種ましまさん。今また更に天神の御子なりと名

告りて、此く攻め來て戦ひたまふ神は、必ず國神ならん、唯吾國を奪はん
と欲して來りたまへるにこそあれ、其天神の御子なりとのたまふは、必ず
虚偽ならん」と問ひたてまつらせしかば、若御毛沼命答へて、天神の御子
いかてか一種のみに坐まさん、汝が君として仕へたてまつる神まこと
に天神の御子に坐まさんば、必ず天津御表物あらん、示したまふべし、との
たまふ時に、長髓彦乃ち饒速日命の天之羽羽矢一隻と歩鞞を取りて、若
御毛沼命に示したてまつる。若御毛沼命此を見たまひて、まことなり、
とのたまひて、また其持ちたまへる天之羽羽矢一隻と歩鞞を取出して、
長髓彦に示したまへり。

長髓彦其天津御表物を見たてまつりて、若御毛沼命の天神の御子に
坐ますと云ふことを知りて、心に畏れしかど、尙邪惡き心あり、すてに防
ぎたてまつらん爲に軍の備したる後に、従ひたてまつらんこと難かり

しかば、益々迷へる計略を守りて、心を翻さんとせず。此によりて可美眞手命甚く患ひたまへり。然れども可美眞手命はもとより、天津の唯若御毛沼命を助けたまふことを知りたまひ、また長髓彦が心正しからず、教へがたきことを知りたまひしかば、遂に長髓彦を殺して、其軍を率ゐて、若御毛沼命に従ひたてまつりたまへり。

若御毛沼命此によりて甚く喜びたまひて、可美眞手命の眞心を賞めたまひ、神異劍を授けて其大きな功勳に答へたまへり。此劍は天照大御神のさとしたまひしまゝに、健御雷命の高倉下が倉の頂を穿ちて墮入れて高倉下に持たせて、若御毛沼命に捧げたつまつらせたまひし布都靈なり。

神倭磐余彦命

然る後に道臣命軍兵を率ゐて土蜘蛛を滅し、可美眞手命天之物部を率ゐて残れる賊虜を攘ひ夷げて、倭國の中悉く静りしかば、若御毛沼命乃ち宮殿を造るべき良き地を求めしめたまひて、畝傍山の東南の樞原と云ふところを大宮地と定めたまひて、宮殿造營はじめしめたまへり。乃ち天之太玉命の孫天富命うけたまはりて、手置帆負彦狭智二柱の神の孫を率ゐて、齊斧齊鋸を以て山の材を切採りて、畝傍の樞原の底津磐根に宮柱太敷立て、高津御空に樽風高峻峙て、瑞の御殿造りて仕へたてまつれり。若御毛沼命此宮に坐まして倭國を安國と治しめしたまひしによりて、始馭天下之天皇命と申したてまつり、たま神倭磐余彦命

と申したてまつる。其磐余のもとの名は片居と云ひ、また片立と云へり。若御毛沼命賊虜を撃ちたまふ時に、皇師多く、其ところに満めり。此によりて磐余と云ふ。

天雷命の裔の忌部は紀國の名草の御木麤香二つの郷に居る、其材を採る忌部の居るところを御木と云ひ、殿つくる忌部の居るところを麤香と云ふ。麤香は正殿なり。

天雷命また諸の齊部を率ゐて種々の神寶玉矛盾木綿麻を作り、櫛明玉命の孫御祈玉を作りて仕へたてまつれり。

然る後に磐余彦命更に大后に立てたまふべき美人を求めたまひ、媛蹈鞞五十鈴媛命を得たまひて、榎原之宮に天津日嗣の御位に即きたまひて、天下の大政事はじめたまふ時に、可美真手命天津瑞寶を奉獻りて神楯を堅て、齊ひたてまつり、また今木を立て、また五十櫛を以て布都

靈之大神を刺し繞らして殿内に齊鎮めたてまつり、皇御孫命の近き御宿直の守護として十種の神寶を藏めたてまつり、天雷命諸の忌部を率ゐて天津御璽の鏡劔を捧げて正殿に安置たてまつり、天之種子命天神壽詞を奏したてまつれり。然る時に可美真手命内物部を率ゐて、矛楯をたて、威儀を示し道臣命來目部を率ゐて御門を護り、其開闔を掌り、此く仕へたてまつりて四方の國に天津日嗣の高御座の高く貴きことを觀せたまへり。

此くて後に神倭磐余彦命天照大御神高皇產靈尊二柱の神の教へたまひしまゝに神籬を樹て、近き守護の神たちを祭りたまひ、また天照大御神の八咫鳥を降しつかはして皇御孫命の御軍を助けたまひしことを思出したまひて、靈時を鳥見山に立て、天照大御神を始めたてまつりて諸の天神を祭りたまへり。

其皇御孫命の近き守護神として祭りたまふ神々は、高皇産靈、神産靈、魂留産靈、生産靈、足産靈、大宮乃賣事代主御膳神合せて八柱あり、後に御巫の祭りたてまつる神たちなり。次に御門の神櫛磐窓豊磐窓二柱の神は、後に御門の御巫の齊ひたてまつる神なり。次に大八洲の靈を生島と申したてまつりて、生島の御巫の齊ひたてまつる神、次に大宮地の靈を座摩と申したてまつりて、座摩の御巫の齊ひたてまつる神坐ます。天之兒屋根命の孫天之種子命は天津諄辭の太祝詞を宣りて、天津罪國津罪を遺ることなく祓ひたてまつり、天富命は諸の神寶また幣帛を捧げ持ちて、大殿を祭り、次に御門を祭り、此く中臣齊部二氏祭祀のことを掌り、猿女君神樂のことを掌り、其他の諸氏ども各々其職を特別けて、共に仕へたてまつれり。

祈年祭祝詞

大御巫の稱辭竟へたてまつる
皇神等の前に白さく、神魂高御魂、生魂、足魂、玉留魂、大宮乃賣、大御膳都神、辭代主と御名は白して稱辭竟へたてまつらば、皇御孫命の御世を手長の御世と、堅磐に常磐に齊ひたてまつり、茂御世に幸へたてまつるゆえに、皇吾陸神、魯岐神、魯美の命と、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へたてまつらくと宣る。

御魂鎮

然して後に、可美真手命、皇御孫命と御後の御爲に、其御壽命の永く坐まさんことを祈りたてまつりて、天津璽乃瑞寶を齊ひたてまつりて、御魂鎮めの祭を行ひたまへり。其天津璽乃瑞寶は可美真手命の御父饒

速日命の天降りたまひし時に、天照大御神より賜はりて持降りたまへ
る十種の神寶なり。此神寶を以て鎮として、御鎮祭を行ひたまふ時に、
媛女君等その神樂をつかさどり、ひとふたみよいつひな、やこゝのた
りや、と唱へて、歌ひ舞ひて仕へたてまつれり。

鎮御魂齊戸祭祝詞

高天原に神留ります皇親神魯岐神魯美の命を以て、皇御孫命は豊
葦原の水穂國を安國と定めたてまつりて、下津磐根に宮柱太敷立て、
高天原に千木高知りて、天乃御蔭日乃御蔭と稱辭竟へたてまつりて、
奉る御衣は上下備へたてまつりて、宇豆乃幣帛は明妙照妙和妙荒妙
五色の物、御酒は颯の邊高知り、颯の腹滿雙べて、山野の物は甘菜辛菜
青海原の物は鱧乃廣物鱧乃狭物、奥津藻菜邊津藻菜に至るまでに、雜
物を横山の如く置きたらはして、獻る宇豆乃幣帛を安幣帛の足幣帛

と平らけく聞こしめして、皇が朝廷を常磐に堅磐に濟ひたてまつり
茂御世に幸へたてまつりたまひて、平らけく御坐所に坐まされしめた
まへと、齊ひ鎮めたてまつらくと申す。

伊勢津彦

神倭磐余彦命長髓彦を滅して倭國を平定けたまひて後に、尙東の方
を鎮平げんと思しめしたまひて、天之日別命に標章の劔を賜ひて、東の
方に國あり、汝往きて、其國を平定しづめよ、とのたまひて遣したまへり。
天之日別命乃ち磐余彦命の教へたまひしまゝに、東の國に到りたま
へば、其國に神あり。天之日別命其神のところに行きて、此く坐ますは
何れの神ぞ、と問ひ給へば、其神答へて、吾は國神なり、吾名は伊勢津彦な

り、このたまふ。天之日別命開きて天神の御子すてに倭國を平定けし
づめたまひて、更に此國を平定けしづめよと教へたまひて、標章の劔を
賜ひて吾を遣したまへり。天照大御神高天原にましまして、此豊葦原
の瑞穂國は吾御子の治しめしたまふべき國なりとのたまひて、天神の
御子を天降したまふ時に、天津日嗣の彌繼々に隆へまさんこと永久に
天壤と共に窮極なかるべしとのたまへり。然れば此國は天神の御子
の治しめすべき國なり。汝の今治しめしたまへる此國を皇御孫命に
捧げたてまつりたまはんや、とまた其神に問ひたまへば其神答へて、吾
此國を求め得て、久しく此國に住めり。然れば此國は吾國なり、天神の
御子の國に非ず、天神の御子にはたてまつらじ、と云ひて防ぎたまはん
とす。

天之日別命此によりて大く怒りて、乃ち軍を起して其神を殺さんと

したまふ時に、伊勢津彦恐れかしてこみて、可畏し、此國は悉く天神の御子
にたてまつらん、吾を殺したまふこと勿れ、吾今より後は此國に居らじ、
と云ひたまふ。然れども天之日別命尙許したまはず、何を以て此國を
去りたまふ驗とはしたまふぞ、と問ひたまへば、伊勢津彦答へて、吾今夜
八風を起し、海水を吹き、波浪に乗りて東に去らん。此によりて知りた
まふべし、と白したまふ。此く白したまひしかば、天之日別命乃ち伊勢
津彦を許したまへり。

天之日別命此く伊勢津彦を許したまひて、軍を整へて待ちたまふ時
に、其夜の半になりて、大風忽ちに起り、荒波高く立ち、光耀くこと晝の如
く、海も陸も共に照明りたり。天之日別命此によりて、伊勢津彦の其國
を去りたまへることを知りたまへり。

天之日別命乃ち倭國に還りのぼりて、伊勢津彦の其國を避りたてま

つりたる状を白したまひしかば、磐余彦命聞きて喜びたまひ、然らば其神の名を取りて、其國の名とすべし、とのたまひて、其國を伊勢國と名けたまへり。また其神の風を起して去りたまひしによりて、神風乃伊勢國と云ふ。

伊須氣余理比賣命

神倭磐余彦命の太后媛踏鞢五十鈴媛命の亦の御名を富登多々良伊須々岐比賣命と申し、また比賣多々良伊須氣余理比賣命と申したてまつる。此美人を太后に立てたまひし理由は、神倭磐余彦命筑紫の高千穂宮に坐ましける時に阿多之小椅君の妹阿比良比賣に遇ひたまひて、御子手研耳命を生みたまひ、次に岐須耳命を生みたまへり。然れども

倭國をしづめたまひて後に、更に太后に立てたまふべき美人を求めたまふ時に、神の御子なりと云ふ媛女あり、大久米命其媛女を求め得て、磐余彦命に告げたてまつれり。

磐余彦命聞きて、其媛女を神の御子なりと云ふ理由は何によりて此く云ふぞ、と問ひたまへば、大久米命答へて、三島瀛咋の女子勢夜陀多良比賣すぐれて美しかりければ、三輪の大物主神其美女を見感て、遇はんとと思しめしたまひて、其美女の厠に入りたる時に丹塗矢に化りて流れ出てたまひて、其厠の溝より其美女の富登を突きたまへり。此く突きたまひしかば、其美女驚きて急ぎ立ち走りて其矢を持ちきて、床のほとりに置く時に其丹塗矢忽ちに麗しき壯夫に成りて、乃ち其美女に遇へり。然るに此美女其時より姪みて、遂に女子を生めり。此によりて神の御子なりと云ふことを知れり。其女子の名を富登多々良

伊須々岐比賣と申し、また比賣多々良伊須氣余理比賣と申す、と告げたまつれり。

磐余彦命乃ち此媛女を得んと思しめしたまひて、大久米命を率ゐて高佐士野に出でて見たまへば、七媛女其野に遊行べり。伊須氣余理比賣其中に交りてゐたり。大久米命乃ち磐余彦命に告げたまつらん爲に、歌を以て白したてまつれり。

倭の高佐志野を

七ゆく媛女ども

誰をし求む、

伊須氣余理比賣其時其媛女どもの前に立てり。磐余彦命其媛女どもを見たまひて、御心に伊須氣余理比賣の前に立てること知りたまひて歌を以て答へたまはく、

「かつがつも最前立てる

可愛をしまかむ、」

大久米命乃ち磐余彦命の大命を其伊須氣余理比賣に告げたまふ時に、伊須氣余理比賣大久米命の裂けたる眼の大きなるを見て、奇異と思ひて歌ひたまはく、

「あめつちちとりましと、

何ど裂ける利目、」

大久米命答へて歌ふ、

「媛女に直にあはむと

吾裂ける利目、」

伊須氣余理比賣遂に皇御孫命の乞ひたまひしまゝに仕へたてまつらんと白したまへり。伊須氣余理比賣の家は狹井川のほとりにあり

しかば、磐余彦命其家に行きたまひて、一夜伊須氣余理比賣に遇ひたまへり。

然して後に、伊須氣余理比賣を大后にしたまひて、宮の内に召入れたまふ時に、磐余彦命其はじめのことを想出したまひて、歌ひたまはく、

「葦原の醜こき小屋に菅盛

彌清敷きてわが二人ねし、」

磐余彦命此伊須氣余理比賣命を大后として、御子日子八井命を生みたまひ、次に神沼河耳命を生みたまへり。磐余彦命かくれたまひて後に、手研耳命伊須氣余理比賣命に遇ひたてまつらんと、思しめしたまふ御心あり、また其三柱の御子を殺さんと謀りたまへり。此によりて、御母伊須氣余理比賣命其ことを悟り知りたまひて、御心に患ひたまひて、歌を以て御子たちに示したまはく、

「狭井河よ雲立ちわたり畝火山

木葉さやぎぬ風吹かんとす、」

又歌ひたまはく、

「畝火山晝はくもとゐ夕されば

風吹かんとぞ木葉騒げる、」

此く歌ひたまひしかば、御子たち聞知りて驚きたまひて、乃ち手研耳命を殺さんとしたまふ時に、神沼河耳命其御兄神八井耳命に弓矢を取持たせて、手研耳命のかくれたまへる室屋の中に入らせたまひしかども、神八井耳命畏れて殺したまふこと能はず、手足慄へてゐたまへり。神沼河耳命乃ち御兄の弓矢を乞取りて、遂に手研耳命を射殺したまへり。

手研耳命殺されたまひて後に、神沼河耳命天津日嗣の高御坐に坐ま

して、天下治しめしたまへり。

大國魂神

伊邪那岐伊邪那美妹妹二柱の大神大八島國を生みたまひし時に、伊邪那岐命此國を浦安國と名けまた細戈千足國、また磯輪上秀真國と名けたまへり。其後に大國主命倭國を見て、玉臈内國と美めたまへり。饒速日命天之磐楯船にのりて高天原より天降りしたまふとさに、大虚を翔行つゝ、倭國に飛降りたまひしによりて、倭國の亦の名を虚空見津倭國と云ふ。然る後に神倭磐余彦命倭國をしづめたまひて、腋上喉間丘に登りて此國の状を見たまてひ、内木綿の眞狭き國なれども、蜻蛉の唇舌の如くもあるかな、とのたまひしによりて其時より倭國を秋津洲

と云ふ。

神倭磐余彦命は後に神武天皇と申したてまつる。

此天皇かくれたまひて御子神沼河耳命天津日嗣の高御座にましまして天下治しめしたまひ、其より後天津日嗣の彌繼々に現御神と大八島國平らけく安らけく治しめして、天下普く皇御孫命の大御恵を仰ぎて、天照大御神をはじめたてまつりて、八百萬の神たち悉く天津日嗣の高御座を守護りたまひ其治しめしたまへる國をまもりたまひて、國安らかに治まりたる後に瑞垣の宮に坐まして天下治しめしたまふ御間城入彦五十瓊殖命の御時に至りて國の内に疾疫多く起り、人民死にて盡んとし、また皇御孫命の大命に従ひたてまつらず叛く者あり、國安からず亂れたり。

此によりて御間城入彦五十瓊殖命大く思ひたまひて思しめしたま

はく、此く國安からず民叛くは、必ず神の御心なり。天照大御神むかし
此豊葦原の水穂國は吾御子の彌繼々に治しめすべき國なりとのたま
ひて瓊々杵命を天降したまふ時に、御手に神寶の鏡を捧げ持ちたまひ
て、此鏡は専ら吾御魂として吾御前を拜ぐが如く齊ぎたてまつりて殿
を同じくし床を一つにして祭りたまふべしと教へたまへり。此く教
へたまひしかば瓊々杵命よりはじめたてまつりて、吾御世に至るまで、
此鏡を大殿の中に齊ひたてまつりて謹みて仕へたてまつれども、此く
貴き御魂を近く置きたてまつること最も可畏し。此によりて此く國
安からず民叛くにこそあれ。然れば今より後は、山河の清きところに
遠く遷したてまつりて、御心のまゝに齊ひたてまつらんと思しめした
まひて、乃ち天照大御神の御魂の鏡を大殿より出したてまつりて、豊
入姫命に託けて倭の笠縫邑に遷して、磯城神籬を立て、齊ひまつらし

めたまへり。豊鍬入姫命は御間城入彦五十瓊殖命の御女なり。其神
寶の劔もまた鏡と共に此時遷したてまつらせたまへり。

乃ち更に齊部連に科せて石凝姥命の裔を率ゐて鏡を造らしめ、天之
一目命の裔を率ゐて劔を造らしめたまひて、此二つを神寶として、近き
守護の御璽として大殿の内に齊ひたまへり。

然れども御間城入彦五十瓊殖命尙御心安からず、天照大御神と共に
大殿の内に並べ祭りたてまつれる倭乃大國魂神をも、また共に出した
てまつりて御女淳名城入姫命に託けて祭らしめたまへり。然れども
淳名城入姫命髪落ち體瘦せたまひて大神の御心のまゝに祭りたまふ
こと能はず、大國魂神倭迹々日百襲姫命を得んと願ひたまへり。倭乃
大國魂神は大物主神の御魂に坐ます、國守りたまふ大神なるによりて、
倭乃大國魂神と申したてまつる。

此くて後に御間城入彦五十瓊殖命神淺茅原に出てたまひて、八十萬の神たちを悉く集へてト問ひたまふ時に神あり、倭迹々日百襲姫命に憑りて、皇御孫命國安からず、民叛くを患ひたまはゞ、能く吾前を敬み祭りたまふべし、必ず國安く平ぎなん、と教へたまへり。御間城入彦五十瓊殖命聞きて、此く教へたまふは誰の神ぞ、と問ひたまへば、其神答へて、吾は倭國の域の内に居る神なり、吾名を大物主神と云ふ、と教へたまへり。乃ち其教へたまひしまゝに、祭らしめたまへり。然れども尙其驗なし。

大田々根子命

御間城入彦五十瓊殖命大物主神の教へたまひしまゝに敬み祭らし

めたまひしかども尙其驗なかりしかば愈々うれひたまひて、乃ち沐浴齋戒して宮殿の内を潔淨めたまひて、此く大神を敬み祭れども尙其驗なきは、大神尙いまだ足らず思しめして、吾誠意を受けたまはぬにこそあれ。尙其祭りたてまつらん狀を教へさとしたまへ、と憐ぎたまひて神床に坐まして寝たまへる夜の御夢に、大物主神貴き人の形になりて現はれたまひて、此く驗なきは吾御心なり。皇御孫命もし吾兒大田々根子をして吾御前を祭らしめたまはゞ、神氣起らず國おのづから平ぎなん、と告げたまへり。

御間城入彦五十瓊殖命乃ち大田々根子と云ふ者を求めたまはんとする時に倭迹々日百襲姫命また白したまはく、昨夜の夢に貴き人現はれて、大田々根子を大物主神を祭る神主とし、市磯長尾市を倭乃大國魂神を祭る神主として、此大神を祭らしめたまはゞ、必ず天下安かりなん

と教へたまへり、と告げたまつれり。

此く告げたまつりしかば御間城入彦五十瓊殖命大く喜びたまひて、乃ち使者を四方に班遣して大田々根子と云ふ者を求めしめたまふ時に、茅渟縣の陶の邑に其人を求め得てたてまつれり。茲に御間城入彦五十瓊殖命また親ら神淺茅原に出てたまひ、諸王大臣また八十諸伴緒を集へたまひて、其人を召して、汝は誰が子ぞと問ひたまへば、其人答へて、吾は大物主神の陶津耳命の女活玉依比賣に遇ひて生みたまへる子奇御方命の子飯肩巢見命の子建甕尻命の子豊御氣主命の子大御氣主命の子大田々根子なりと白したてまつれり。

御間城入彦五十瓊殖命益々喜びたまひて、天下たひらぎ、民榮えなん、とのたまひて、乃ち大田々根子命を神主として御諸山に大三輪の大神大物主神を拜祭りたまひ、長尾市を神主として倭乃大國魂神を祭らし

めたまひ、また伊賀色許男命に科せて天之八十平釜を作らしめて天神の社地祇の社を定めて神地神戸をたてまつりたまひ、また宇陀の墨坂神に赤色の楯矛をたてまつり、大阪神に黒色の楯矛をたてまつり、また坂の尾の神河の瀬の神に至るまで悉く遺ることなく幣帛たてまつりて祭りたまひしかば此によりて役氣悉く息み天下おのづから平らぎ五つの穀物實りて民饒へり。

大田々根子命の大物主神を祭りたまふ時に、高橋の活目と云ふ者大三輪の掌酒となりて皇御孫命に御酒を捧げたまつりて歌ふ。

此御酒は吾御酒ならず、
倭なる大物主の醸みし御酒、
幾ひさ幾ひさ、

此く歌ひて神の宮に宴する時に諸大夫たち歌ひたまわく、

美酒三輪の殿の

朝戸にも出て、行かな三輪の殿戸を、

御間城入彦五十瓊殖命歌ひたまはく、

美酒三輪の殿の

朝戸にも押開かね三輪の殿戸を、

此く歌ひたまひて乃ち其神宮の御門を開きて出てたまへり。

大田々根子命は後の三輪君の祖なり。此大田々根子命を神の御子なりと知れる理由は、陶津耳命の御女活玉依比賣の容姿すぐれて美しかりければ大物主神壯夫になりて此嬢子のところに通ひたまへり。

此壯夫豈は見えず、夜半に忽ち来りて活玉依比賣に遇へり、其形姿威儀世にすぐれて匹儔なく貴かりしかば遂に相感て、共に住みける間に、其嬢子幾時もあらぬに姪めり。其父母其女の姪めることを怪しみ

て汝はあつから姪めり。男なきに何由して姪めるぞ、と問へば嬢子答へて、麗美き壯夫あり、其名を知らず、また何處の者なりと云ふことを知らず、夜毎に來て住める間にあつから懷姪めり、と云へり。

父母乃ち其男を知らんと欲して、然らば赤土を床のほとりに散し置きて其男の夜明に去らんとする時に、績麻を針に貫きて其男の衣の襦に刺せ、と其女に教へたり。乃ち父母の教へしまゝに、績麻を男の襦にさして夜明けて後に見れば針つけたる麻は戸の鉤穴より控通りて、唯三勾のこれり。此によりて其神異き男の鉤穴より出てたりと云ふことを知りて糸のまに、尋ねゆさしかば三輪山に到りて大神の社に留れり。此によりて三輪の大物主命の通ひたまへりと云ふことを知れり。此くて後に活玉依比賣の生みし子を奇御名命と云ふ、大田々根子命は其裔なり。

倭迹々日百襲姫命

御間城入彦五十瓊殖命天神の社地祇の社を祭りたまひて後に、大彦命を北の國に遣し武沼河別命を東の國につかはし、吉備津彦命を西の國につかはし道主命を丹波國につかはして皇御孫命の天命に従ひたてまつらぬ者などを平定しづめしめたまふ時に、大彦命高志國に行かんとして山城の弊良坂に到りしかば腰裳つけたる少女あり其坂に立ちて歌へり。

こはや御間城入彦はや御間城入彦はや、

己が緒をぬすみ弑せむと

後戸よいゆきたがひ、

前戸よ伊行き違ひ窺はく、

知らにと御間城入彦はや、

大彦命此く歌ふを聞きて怪しと思ひて馬を返して、汝が云へることは何のことぞ、と其少女に問ひたまへば、其少女答へて、吾は云ひたることなし、唯歌をこそ詠ひつれ、と云ひてまた其歌を詠ひて、忽ちに失せたり。

大彦命乃ち還りのぼりて御間城入彦五十瓊殖命に白したまふ時に、倭迹々日百襲姫命聞きて、聰明叡智く能く行末のことを知りたまへる皇女に坐ますによりて直ちに此歌の意を悟りたまひて、此は武埴安彦命の邪き心を起して皇御孫命の天津日嗣の高御座を傾けんと謀りたまふ兆ならん。其武埴安彦命の妻吾田媛ひそかに此國に来て、倭の香山の土を取りて領布につゝみて、此は倭國の物質と云ひて呪咀して歸りたまへりと云ふことを聞けり。此によりて其邪き心ありと云ふこ

とを知るなり。疾く計りたまはずば、遅かりなん」と告げたてまつりたまへり。武埴安彦命は御間城入彦五十瓊殖命の御兄なり。

御間城入彦五十瓊殖命乃ち大彦命に日子國夫玖命を副へて遣したまひしかば、武埴安彦命其妻吾田媛と共に悉く滅されたまへり。

其時より後天下永く平ぎて民さかえたり。此によりて御間城入彦五十瓊殖命を初國所知天皇と申したてまつる、後の世に崇神天皇と申したてまつるは此天皇なり。

倭迹々日百襲姫命後に大物主神の妻となりて仕へたてまつりたまへり。然れども大物主神常に晝は見えたまはず、夜のみ來て遇ひたまへり。此によりて倭迹々日百襲姫命太く思ひたまひて、大神常に夜のみ來たまひて晝は見えたまはぬによりて分明かに御容姿を見たてまつることを得ず。願はくば暫し留りたまへ。明る旦貴き御威儀を見

たてまつらん」と白したまへば、大物主神聞きて、汝の乞ひたまふこと實に道理なり。然れば吾明旦に汝の櫛笥に入りて居らん、能く見たまふべし。然れども吾形を見て驚きたまふこと勿れ」と教へたまへり。

倭迹々日百襲姫命聞きて御心に甚怪しと思ひたまひて、明るを待ちて其櫛笥を見たまへば、美しき小蛇あり、其長さ大さ衣紐の如くなるが其中に居たり。倭迹々日百襲姫命驚きて泣きさけびたまへば、大物主神耻ぢたまひて忽ちに美しき壯夫に化りて、汝忍びず、遂に吾に羞見せたり。然れば吾もまた汝に恥見せん」とのたまひて、忽ちに大虚を踐みて御諸山に登りたまへり。倭迹々日百襲姫命此によりて、大物主神を怒らせたてまつりしことを悔ひたまひて、悲さに堪へず仆れたまふ時に、箸にて御陰を撞きて、遂に死にたまへり。其御墓は大市にあり、箸にて御身を傷ひて死にたまひしによりて、其時の人此御墓を箸御墓と云

へり。

此御墓を作る時に晝は人づくり、夜は神づくりたまへり。石は大坂山の石を運びて造れり。山より御墓に至るまで、人民相踵きて手より手に持渡して運び。此によりて其時の人歌へり。

「大坂につきのぼれる石群を

手こしにこさば越しかてむかも、」

出雲振根

御間城入彦五十瓊殖命、武夷鳥命の高天原より持降りたまひし神寶、出雲國杵築の大神宮にありと聞きたまひて、武諸隅を出雲國に遣して其神寶を取りたてまつらしめたまふ時に、出雲振根其神寶をつかさど

れり。然れども武諸隅が出雲國に到りし時に、出雲振根築紫國に往きて其の國に在らざりしかば、出雲振根が弟飯入根乃ち皇御孫命の大命をうけたまはりて神寶を其弟甘美韓日狹と子鵜瀦瀦に託けて貢上れり。

然して後に、出雲振根築紫國より還りて、神寶をたてまつりたりと云ふことを聞きて、大命なれども吾還るを待ちて後にこそ貢上らめ、何を畏みて此く急ぎて神寶を取出してたてまつりしぞ、と云ひて其弟飯入根を責めて年月を經れども尙怒りうらむ心解けず、遂に其弟を殺さんと謀りて、止屋の淵に妾生へたり、共に往きて見ん、と云ひて弟を欺きて共に住けり。

出雲振根は木刀を作りて眞の大刀の如く見せて佩き、飯入根は眞の大刀を佩きて、共に其淵のほとりに到りしときに、出雲振根其弟を欺き

て、淵の水清し、共に游泳せん」と云へば、弟欺かれて、各々其佩ける大刀を解きて水に入る。兄乃ち先づ陸に上りて、弟の眞の大刀を取りて佩く。弟驚きて兄の木刀を取佩きて共に相撃つ時に、弟木刀を抜くことを得ず、遂に殺されたり。

甘美韓日狹鷲瀟二人急ぎ倭國に上りて、出雲振根が飯入根を欺きて殺したる状を具に白せしかば、御間城入彦五十瓊殖命乃ち吉備津彦命と武沼河別命をつかはして、出雲振根を殺さしめたまへり。此によりて出雲臣ども畏れて大神宮の祭を怠りて、久しく祭りたてまつらざりし時に、丹波國の氷上に、氷香戸邊と云ふ者あり、其子幼稚くしておつづから物言へり。

「玉藻しづかし出雲人まつれ、
眞種マタタの甘美鏡カミカミ押しはふれ、

甘美御神カミカミの底寶御齋ソコタカラミぬし、

山河ヤマカハの水泳ミヅユる御魂ミタマ静シヅめかけよ、

甘美御神カミカミの底寶御ぬし、

此く云ひしかば其父聞きて怪みて具に皇御孫命ミコノミマに白したてまつる時に、御間城入彦五十瓊殖命聞きたまひて、此は稚兒ワカゴの言コトに似ず、必ず神の託ツケきて此く云はせたまふにこそ、とのたまひて、乃ち其出雲臣イツノミどもに仰せて大神宮オホカミヤを祭らしめたまへり。

出雲大神宮イツノミ

御間城入彦五十瓊殖命かくれたまひて後に、御子活目入彦五十狹茅命ミコノイビ天津日嗣アマノヒツの高御座タカミイにまじまして天下治あめのしらすしめしたまふ時に、御子嬰知

別命八拳巖胸前に至るまで物言ひたまはず空飛ぶ鶴の啼く聲を聞き
てはじめて物言はんとしたまひしかば乃ち其鳥を取りたてまつらし
めたまふ。然れども譽知別命此鳥を見たまひて物言はんとしたまへ
ども尙思しめすまゝに物言ひたまふこと能はず此によりて御父活目
入彦五十狹茅命いたく思ひたまへり。

此く思ひたまひて寝たまへる夜の御夢に神現れて覺したまはく吾
宮を天津日嗣の大君の御殿の如く造りて祭りたまはゞ御子必ず物言
ひたまはん」と教へたまへり。乃ち大占に占相ひて此く教へたまふは
何れの神の御心ぞと問ひたてまつらしめたまへば出雲の大神の御心
なりと云ふことを知りたまへり。

此くて御子を出雲國に遣して大神宮を拜ましめんと思しめして誰
を御子に副へて遣すべきと云ふことを占ひたまへば曙立王其占に當

りたまへり。乃ち曙立王に科せて呪咀はしめたまひて此大神を拜む
にまりて果して賊の効驗あらばこの鷲巢池の樹に棲める鷲墮ちよ」と
のたまへば其鷲忽ちに地に墮ちて死にまた活きよとのたまへばまた
忽ちに活返れり。また甜白梅前なる葉廣熊白梅を呪咀ひて其樹を枯
しまた活したまひて効驗ありしかば乃ち曙立王を御子に副へて出雲
國に遣したまへり。

譽知別命出雲國に到りて大神を拜みたまひて後に還り上りたまふ
時に肥河の中に黒標橋の假宮を作りて留りたまへり。出雲の國造の
祖岐比佐都美と云ふ者青葉の山をかざりて其河下に立て、大御食た
てまつらんとせし時に譽知別命見たまひてこの河下に青葉の山なせ
るは山と見えて山にあらずもし出雪の石崩之會宮に坐ます葦原色許
男大神を持齊ぐ祝が大庭か」と問ひたまへり。此くのたまひしかば曙

立王聞きよるこび見よるこびて、其御子をは檳榔之長穗宮に坐せまつりて、驛使を遣して御父の命に具に其ことを白したてまつらせたまへり。

活目入彦五十狹茅命此によりて大く喜びたまひ、乃ち菟上王をつかはして、出雪の大神の宮を造らしめたまへり。

伊勢大神宮

活目入彦五十狹茅命また天照大御神を盪相入姫命より離したてまつり、御女倭姫命に託けて祭らしめたまへり。倭姫命乃ち天照大御神を鎮めたてまつるべき地を求めつゝ、近江國より美濃國を巡りて伊勢國に到りたまふ時に、天照大御神倭姫命の御夢に現れたまひて、此神風

乃伊勢國は常世の浪の重浪よする國なり、傍國の可憐國なり、吾この國に居らんと欲す、と誨へたまへり。

倭姫命乃ち天照大御神のさとしたまひしまゝに、伊勢國の五十鈴川上に大神の宮を立てたまへり。磯宮といふ、後に内宮といふは此宮なり。倭姫命遂に天照大御神の御杖と成りたまひて、永く仕へたてまつりたまへり。伊勢の齋宮と云ふことは、此時よりはじまれり。

然して後に天照大御神の乞ひたまひしまゝに、豐宇氣比賣命を丹波國より伊勢國に遷したてまつれり。外宮に鎮りたまふ大神なり。また豐受大神とも申したてまつる。

祈年祭祝詞

辭別けて、伊勢に坐す天照大御神の太前に白さく、
皇神の見霽しませす四方國は天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青雲

の嵩く極み、白雲の墮坐向伏す限り、青海原は楫柁干さず、舟の艫の至り
りとどまる極み、大海原に舟滿ちつゝけて、陸より往く道は荷緒縛堅
めて、磐根木根ふみさくみて、馬の爪の至りとどまる限り、長道ひまな
く立ちつゝけて、狭き國は廣く、峻き國は平けく、遠き國は八十綱打掛
けて引きよすることの如く、皇大神の寄さしたてまつりたまへば、荷
前は皇大神の大前に横山の如く打積みおきて、残をば平けくさとし
めし、また皇御孫命の御世を、手長の御世と堅磐に常磐に齋ひたてま
つり、茂御世に幸へたてまつるゆえに、皇吾贖神魯伎神魯美の命と
じもの頸根つさぬきて、皇御孫命の宇豆乃幣帛を稱辭竟へたてまつ
らくと宣る。

月次祭祝詞

度會の宇治の五十鈴の川上に、大宮柱太敷立て、高天原に千木高

知りて稱辭竟へたてまつる。

天照坐す皇太神の大前に申したてまつる。天津祝詞の太祝詞を神
主部物忌等もろく聞こしめせと宣る。

天皇が御命に坐す御壽を、手長の御壽と湯津磐村の如く常磐堅磐
に伊賀志御世に幸へたまひ生れます皇子たちをも恵みたまひ、百官
人たち天下四方國の百姓に至るまで長く平けく作り食る五つの穀
物をも豊にさかえしめたまひ、護りめぐまひ幸へたまへと、三郡國々
處々に寄せたてまつれる神戸の人たちの常も進る御調の絲由貴の
御酒御饗を横山の如く置足はして、大中原太玉申に隠りはべりて、今
年六月十七日の朝日の豊榮登りに稱へ申すことを神主部物忌等も
ろく聞こしめせと宣る。

草薙寶劍

活目入彦五十狹茅命かくれたまひて後に、御子大足彦忍代別命天津日嗣の高御座に坐まして天下治しめしたまふ時に、東の國の蝦夷悉く叛きたてまつりしかば皇孫孫命いたく患ひたまひて、御子日本武尊に比々羅木の八尋矛を賜ひ、東の國の荒振神また吾大命に従はぬ者どもを悉く平定しづめよ、とのたまひて遣したまへり。

日本武尊乃ち御父大足彦忍代別命の教へたまひしまゝに罷出てたまひ、先づ伊勢國の大神宮を拜みたまひて、御姨倭比賣命に白したまはく、皇御孫命は早く吾を死ねとや思しめすらん。熊襲を撃ちに遣して還上りて、いまだ幾時もあらぬに、今また東の國に遣して荒振神どもを

しづめしめたまはんとす。此によりて思へば、吾を早く死ねと思しめしたまふなり、とのたまひて患泣きたまへば、倭比賣命聞きて天之叢雲劍を賜ひ、また瓊を賜ひて、若し急事あらば、此瓊を解きたまふべし、と教へて出しやりたまへり。

日本武尊尾張國に到りたまへば、其國に宮簀姫といふ者あり。すぐれて美しかりしかば、日本武尊遇はんと思しめし、かども、東の國の山河の荒振神どもを悉く攘ひしづめて後に還上りたまはん折にこそと思しめして、此く期りおきて東の國に出立ちたまへり。

此くて駿河國に到りたまへば、其ところの國造詐りて、此野の中に大きな沼あり、其沼に住める神あり、甚荒振神なり、と告げたてまつれり。日本武尊其言を眞實と思しめして、其野に入りたまふ時に、其國造日本武尊を害ひたてまつらん心あり、乃ち其野に火を著けたり。日本武尊

欺かれたりと知りて、倭比賣命の賜ひし囊の口を解きて見たまへば、其裏に火打あり。乃ち先づ天之叢雲劍を以て野の草を刈撥ひ、其火打を以て火を打出し、向火を著けて其野を焼きたまひしかば、其國造ども悉く滅されたり。

日本武尊此劍を以て草を薙きたまひしによりて、其時より此劍を草薙劍と云ふ。

日本武尊東の國の蝦夷どもを悉くしづめたまひて後に、また尾張國に還りつきたまひて、期りあきたまひしまゝに宮簀姫の許に到たまへり。此くて宮簀姫に遇ひたまひて、久しく留りたまふ時に、近江國伊吹山に荒振神ありと聞きたまひて、草薙劍を宮簀姫の許に置きて、其荒振神を取りに登りたまへり。然れども日本武尊其荒振神を取りたまふのこと能はず、其神の毒を受て遂に死にたまへり。

然る後に、宮簀姫日本武尊の歿し置きたまひし草薙劍を熱田の社に齊祭れり。

大八島國

活目入彦五十狹茅命を後の世に垂仁天皇と申したてまつり、大足彦忍代別命を後の世に景行天皇と申したてまつる。此天皇かくれ給ひて後に、御子若足彦命つきたまひ、若足彦命かくれたまひて後に、日本武尊の御子足仲彦命天津日嗣の高御座に坐まして天下治しめしたまへり。若足彦命を後の世に成務天皇と申したてまつり、足仲彦命を後に仲哀天皇と申したてまつる。此天皇の太后息長足比賣命は新羅國を撃ちたまひしによりて、後に神功皇后と申したてまつる。御子譽田別

命は御母の腹の中に坐まして、共に新羅國を撃ちたまひ、また天下治しめしたまひしによりて、後の世に應神天皇と申したてまつる。
息長足比賣命の新羅國を撃ちたまふ時に、天照大御神をはじめたてまつりて、八百萬の神々たち悉く御軍を助けたまへり。然る後に息長足比賣命新羅國より還りたまひて、天照大御神を廣田に祭りたまひ、事代主命を長田に祭りたまひ、底筒男中筒筒上筒男三桂の神を住吉に祭りたまへり。

應神天皇は後に八幡大神と現れたまへり。

此くて天津日嗣の彌繼々に現御神と天下治しめして、天地と共に窮極なく榮えたまひ、天照大御神をはじめたてまつりて、八百萬の神たち悉く皇御孫命の遠き近き御守護神としてまもりたまへば、崇る神は崇りたまふことなく、荒振神は、荒びたまふことなく、大八島國千代萬代に

榮えゆくによりて、神國とは云ふなり。

還却崇神祭祝詞

高天原に神留りまして事はじめたまひし神魯岐神魯美の命もちて、天之高市に八百萬の神たちを神集へ集へたまひ、神議り議りたまひて、我皇御孫命は豊葦原の水穗國を安國と平らけく知しめせと、天之磐座放ちて、天之八重雲を稜威の道別に道別きて、天降し寄さしたてまつりし時に、誰の神を先つ遣して水穗國の荒振神たちを神攘ひ攘らひ平けむと神議り議りたまふ時に、諸神たち皆量り申さく、天之穗日命を遣して平けむと申しさ。
是を以て天降しつかはす時に、此神は返言申さず、次につかはし、健三熊之命も父のことに従ひて返言申さず。又つかはし、天若彦も返言申さず、高津鳥の殃によりて立どころに身うせき。

是を以て天津神の御言もて更に量りたまひて、經津主命健御雷命
三柱の神たちを天降したまひて、荒振神たちを神攘ひ攘ひたまひ、神
和し和したまひて、語問ひし盤根樹立草乃片葉も語止めて、皇御孫尊
を天降し寄さしたてまつりき。

此く天降し寄さしたてまつりし四方の國中と、大倭日高見之國を
安國と定めたてまつりて、下津盤根に宮柱太敷立て高天原に千木高
知りて、天乃御蔭日乃御蔭と仕へたてまつりて、安國と平らけく知し
めさむ皇御孫尊の天之御舍の内に坐す皇神等は荒びたまひ、健びた
まひ崇りたまふことなくして、高天原に始めしことを神ながらも知
しめして、神直日大直日に直したまひて、此地よりは四方を見霽かし
山川の清けきとろに遷り出てまして、吾地と知させと進る幣帛
は、明妙照妙和妙荒妙に備へたてまつりて、見明ひるものと鏡翫ぶも

のと玉射放つものと弓矢打断るもの太刀馳出るものと御馬御酒に
聰の邊高知り、聰の腹滿雙べて、米にも類にも、山に住むものは毛乃和
物毛乃荒物、大野原に生ふるものは甘菜辛菜、青海原に住むものは鱧
乃廣物、鱧の狭物、奥津藻菜邊津藻菜に至るまで、横山の如く、凡物に
置き足らはして奉る字豆乃幣帛を皇神たちの御心も明かに安幣帛
の足幣帛と平らけくきしめして、崇りたまひ健びたまふことなく
して、山川の廣く清けきところに遷り出坐して、神ながら鎮りませと、
稱辭竟へたてまつると申す。

附 録

神話に現はれたる日本國民性

(明治四十四年十一月二十日人性學會講演會にて)

人性學會の目的は文字の通りでありまして、即ち人間に就て學問上様々の方面から研究するのであります。併し其研究たるや單に研究せんが爲の研究では無く、其研究に依つて小にしては單獨の人、即ち個人、それから大にして社會、國家、民族、更に進んでは人類全體の向上發展進歩といふことに貢献したいといふのが其趣意であります。詰り人間を作り、國民を作り、人類を作るといふ廣い意味に於ての教育であります、最高尙なる意味に於ての教育であります。

教育の意義を平らして此教育といふことに就ては、今日までの世間一般の考は少しく違つて居る處がありはせぬかと思はれます。人間といふ者は、生れながら其性は善である、凡ての人間は生れながら清淨潔白である、或は神の性を受けた完全圓滿なものである、唯、其境遇と教育の如何に依つてどうしても變化するといふやうな事を、今日でも言つて居る。成程是は少年子弟を勵ます上から申すと誠に結構でありますが、併し、實際の事實は決してそうぢや無い。其證據には人間が幾人居つても悉く皆違つて居る、そして違つて居る中にも亦似て居る所がある、若し人間が昔からの説に在る通り、悉く完全圓滿なる性を受けて、人の性は徹頭徹尾善であるとしたならば、親は親丈けて濟んで了ふ、子は子丈けて濟んで了ふ、親子の間に何等の關係が無い、親も子供も、自分も他人も、縦に考へても、横に考へても、四海同胞悉く同じことである、其間に聯絡も無ければ

進歩も無い等である。所が事實はさうで無い。然らばどうして人間は百人居れば百人ながら悉く違つた性質を持つて居るか、又大勢の人間が集つて一つの民族をなす場合に於ても、其民族々に夫々異つた特有の性質があるのは、何う云ふ點から説明するかといふと、私は遺傳と云ふことに依つて説明したいと思ひます。詰り我々は親の性を遺傳して居る、私は兩親の子であるから、私の身體を組織する所の無數の細胞は悉く兩親の細胞から出來て居る、父と母の細胞が集つて一種の根本の細胞を作る、此細胞が分離して無數の細胞となつて人間の身體を作るのであるから、此無數の細胞は皆悉く兩親の性質を受けて居る譯であります。それで私は誰が見ても兩親に似て居る、私の兄弟は幾人あつても皆似て居る、五人あつても八人あつても皆兩親に似て居る。これ共亦其中に違ひがあるといふは何故かといふと、是は其細胞が兩

親の性質を受けてから生れる迄の間に色々な變化をして居ると思ひます。それに兩親の性質と云ふものも單純なものでは決して無い例へば私の親父にしたところて無数の性質を持つて居る。朝寝をする性質があり、人の家に行つたら遠慮をしないといふ性質があり、或は話をする時分に横を向くといふ性質があり、其他色々云ふやうな性質がある、母にしても同じである、其父と母との無数の性質が其子に遺傳して行くけれども、其無数の性質は悉く同じ様には現はれはしない、或場合に於ては其性質の中の或者が一時潜んで居つて、孫の時代になつて始めて現はれると云ふ事がある。

それであるから世の中の人間は幾人生れても、其人間は必ず異つて居りながらも、亦互に似て居る處があると云ふのは共通の性質を遺傳するからで、國民性と云ふものも此點から説明する事が出来るのであ

ります。私の兩親は二人、其兩親の兩親は四人、其又兩親の兩親は八人といふ勘定で行くと、十代前の私の祖先は五百人、二十代前では二十五萬人になる。其二十五萬人の性質が私に遺傳して居る譯であります。だから日本人は何人あつても悉く同じ性質を帯びて居る、是が國民性といふものゝ有る譯であらうと思ひます。

さて人間は自分で自分の個性を知ることが困難である、個人として自分の個人性を知ることが困難なると等しく、民族として自分の民族の固有の性質を知るといふ事は困難であります。併しながら個人にして自分の個人性を意識せず、國民にして自分の國民性を能く意識しない時には、將來の發展といふものはチヨツと困難である。何う云ふ風に發展すればよいか、如何にすれば自分の天職を盡すことが出来るかといふ事は、個人性を知り、國民性を知つた上でないと判らないので

あります。此意味に於て日本民族が自分の國民性を知るといふ事は
大に必要であります。

神話の
研究
私は今、其國民性といふものをば、神話の方面から少しく研究して見
たいと思ふ。尤も日本國民性の研究は神話の方面からばかりで分る
ものぢや無い、日本國民の精神的産物即ち文明のあらゆる方面、法律、哲
學、宗教其他種々雑多の方面から研究すべきものでありますけれ共、私
は先づ自分のかねて考へて居る神話の方から、少し御話したいと思ふ
のであります。

神話といふものはどんなものであるかといふことは面倒になりま
すから、先づ世間一般の定義を、それで宜しいとして置いて茲に申しま
す、さて日本の神話と云ふのは何を指すかと申すと、古事記と、日本書紀
の神代の卷、古語拾遺、それから風土記、その風土記も出雲、常陸、豊後、肥前、

播磨此五つだけは殆ど完全に傳はつて居りますが、其他のものは唯斷
片が残つて居る丈けてあります。それから其次に延喜式の中に在る
祝詞、かう云ふものは日本神話の重なる源泉であります。ところが今
日では古事記が一番人氣を得て居りましたして總て古事記で以て日本の
神代史も分り、又日本の神話は古事記で判るといふ風に、大變古事記ば
かりを世間では信用して居りますけれ共、必ずしも古事記ばかりが正
しいものぢや無い、學問上から言へば日本書紀の方が却て或は完全て
あるかも知れません。併し世間では大變古事記といふものを信仰し
て居りますから、先づ今日は古事記に依りてその話を致します。古事
記といふ本は誰が書いたもので、何う云ふ風にそれが出来たものであ
るといふやうな事は、學問上チョツと面倒なことであります、未だ今
日ではハッキリした説は無いのでありますから、それは略しまして、古

事記の内容即ち其本の中にはどんなことを書いてあるかといふことを大體御話いたします。

古事記を開けますと、先づ始の處に「天地初發之時、於高太原成神名、天之御中主神、次高御產巢日神、次神產巢日神」と斯う三つ列べてあります。其處に註がありまして、此三體は獨化隱身の神であるとしてあります。男女夫婦といふ様に二人で無くて一人づゝ出來た神である、隱身と云ふのは、身を隠して身體の見えない神だと云ふこととてありませうけれども、學問上から言へば果して何んな神であるかは分りませぬ。その次の節には「次國稚如浮脂而久羅下那洲、多陀用幣流之時、如葦牙、因萌騰之物而成神名」とあつて宇麻志阿斯訶備比古遲神、次天之常立神を擧げて、又其註に獨化隱身としてあります。其次に「次成神名」とあつて二つの神があります。第一が國之常立神、次は豊雲野神であります。其次に夫婦

のやうに相並んだ神が五對あります。名を申しますと宇比地遲神、須比智遲神、角杵神、活杵神、意富斗能地神、大斗乃辨神、淤母陀琉神、阿夜訶志古泥神、最後の二神が伊邪那伎神、伊邪那美神であります。天地開闢から此處までの一段は唯天神の名を列べたばかりでありまして、何う云ふ風に説いて宜いのか分りませぬ。是からが本當の日本神話になるのてあります。それとてこれまでの一段は序文と見て、是からが本當の日本神話であると思つて古事記を讀むのであります。

さて本文に這入ると、於天神諸命以、詔伊邪那伎命、伊邪那美命二柱神、修理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛」とあります。此は伊邪那伎、伊邪那美の二神に、高天原の天神から、多陀用幣流之國、即ちまだ凝らない國を固く造つて國家が出来るやうにせよといふ勅語であります。それから伊邪那伎、伊邪那美の二神が此國に天降りまして夫婦の交りがあ

る、そして先づ第一に大八洲國を産み、それから萬物を産み、其萬物を夫々支配する神々を生み、最後に天地萬物を支配する所の主宰神を二人で産まうといふ相談がありました、そして生みなされたのが日本國家の祖先たる天照大神であります。それで以て古事記の第一段が終ります。詰り第一段は伊邪那伎、伊邪那美の造化二神が天地萬物を生み、其を支配する爲に主宰神を生まれるといふこととして了つて居る。其次の一段は挟んだ一節でありまして、話が別に成つて居ります。此一段を通常出雲神話と申します。素盞鳴尊は天照大神の弟であります、此神が出雲國に降られて、其子孫が繁殖してそこに一つの國家を造るといふ話であります。其舞臺が出雲であるから出雲神話と云ふのであります。出雲に於て其子孫が段々と續いて一番最後に大國主命が其子と共に此國を支配して居られる。其處までが古事記の第二段で、

一節の「エピソード」即ち間曲に成つてゐます。

それから第三段で、天照大神が出雲國を征伐なされます。古事記に「天照大御神之命以、豊葦原之千秋長五百秋之水穗國、我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國」との勅命が出て居ります。それが天孫降臨の章であります。其征伐が濟んで出雲國が全く征服されて了ふと、其時に天忍穗耳命の御子に當る瓊々岐尊が天降りなされて、日向國に宮を造られました、此高千穂宮で三代の間續いて神武天皇の東征と成るのであります。

それで古事記の天地開闢から天地萬物の主宰神たる天照大神の生れる處までが第一段、それから第二段が出雲神話で、第三段が高千穂の時代であります。そこで此神話を讀んで見ますと、總てのことが何時でも高天原の神の勅命から來て居る、此國を造るのも、修理するのも、又

皇室の基を起すのも悉く天神の勅命でありまして、此主意がズツと始めから終まで一貫して居る。詰り是が國家的の思想であります。此思想が外の國の神話にはどうも缺けてをります。世界の神話と云つても、先づ普通世間で申しますのは、希臘神話、印度神話、それから北歐羅巴神話、是は日耳曼民族の神話であります、それから支那の神話、日本の神話と此五大神話であります。併し支那の神話は其材料は澤山あります、併し其昔の詩人が其神話を纏めて一篇の文學に綴つて居ないのてありますから、どうも材料ばかりで統一がありません、神話は有つても神話文學は先づ無いと云つても宜い位であります。之に反じて日本の古事記は始めから終まで堂々たる立派な文學であります、神話文學といふ點から見ると實に立派なものであります。

さて日本、印度、希臘、日耳曼の四つの神話に就て、比較を試みたお話を

致します。元來神話といふものは、太古の自然教即ち自然民族の宗教から起つたものでありますから、其性質は悉く皆或點に於て共通して居る、其根本に於ては同一であります。併ながら其神話の發達は國民性の影響を受けてをりますから、凡ての國民の神話は異つてをります。此點に於て日本民族の特色は其神話の中に大に現はれて居るのであります。

先づ神と人間との關係から申しますと、神は人間を保護するものである、或は文明を保護するものである、此事は何處の民族の神話にも見えてゐます。併ながら、それ以外に於て、希臘の神話は神と人間との利害が常に相反して居ることを示してゐます。神は勝手次第に人間を作つて置いて何時までも自分たちばかりで世界を維持したいといふ考がある。然るに人間は飽まで神に反抗して文明を作り、さうして段

々神の領地を蠶食せうと云ふ傾向を持てゐる、此事が希臘の神話の全體に通ずる思想であります。其例を挙げますとニオーベといふ人があります、是は能く美術の寫眞畫館などに模造が出てをります、此ニオーベといふ女は或國の女王でありまして、息子が六人娘が六人合せて十二人の子を持つてゐた。所がオリムピアの太陽の神アポロと月の神ダイアナといふ兄弟の母のラトナといふ神は、唯二人の子しか無い。そこでニオーベが神様だと威張つてもラトナは唯二人しか子が無いぢやないか、自分は十二人の子供がある、と斯う威張つた。其を聞いてアポロとダイアナが大に立腹して、其十二人の子供を残らず殺して了つたといふ話があります。

それから希臘の神話に於ては、人間の先祖はプロメテウスといふ者であります。是は人間の先祖であると同時に人間の文明の先祖であ

ります。非常に反抗心の強い人物でありまして、絶えず神様と喧嘩をして居る、神様にどんな知慧があつても、必ず自分の方が知慧の競争に於ては負けないと云つて何時も喧嘩をする、そして必ず負ける、負けると必ず罰を受ける。負けるといふのは、其當時までは未だ希臘民族は其神話の神を信仰して居つたからであります。神様が勝つといふのは當然であります、反抗したと云ふ事が注意すべき點であります。負けると非常な酷い罰を受ける。或時には岩に繋がれて、鷲に胸をつかれると云ふやうな刑罰を受けて居る。それにも拘らず矢張り飽く迄反抗する。詰り人間の文明といふのは、神の時代とは相反對して居るといふことを證明するものであります。

それから神様はもし人間が火を焼いて物を煮るといふことを覚えたらば、人間の文明が進歩して困るといふので、人間に火を貸して呉れ

ない、詰り人間を何時迄も無智蒙昧の境に束縛して置きたい、さうすれば何ても、自分の思ふ通りになると云ふ考であります。所がプロメテウスは到頭神を欺して、其火を盗んで人間に火を焼いて物を煮ることを初めて傳へた。そこで彼は非常に神の怒に觸れて、其子孫は永久に神の怨を受けて居る。

それから其當時までは人間に女は無かつた、男ばかりであつた。神様が人間を罰する爲に、女を作つたのであります。其女を作つた神は、オリムピヤの十二神中の大工の神即ち、工藝の神ヘフハイストスであります。此神が女性の人間を作ると、今度は美の神がその作つた人間の女に容貌の美を與へる、知慧の神が知慧を與へる、商賣の神が嘘を言ふことの知慧を與へる、此がバンドーラと云つて女の先祖であります。此女を作つて之を人間に呉れやうといふ考でありまして、同じく十二

神の中の使の神、大變足の早い、足に羽のあるヘルメスといふ神がバンドーラを連れて天から降つて、プロメテウスの弟のエピメテウスの家へ入れる。プロメテウスは怪しからんそんな者を貰つては不可いと云つたけれども、餘り女が美しかつたものだから其に迷つて貰つて了つた。其女の持參物に一つの筐があります。其筐を明けると、病氣だの、火事だの、喧嘩だの、色々な人間界の悪いことが飛出して來る、是はと思つて蓋を締めて了ふと、人間の幸福丈けが内に残つた、それだから人間界には永久に病氣、喧嘩、泥棒、人殺し、あらゆる悪いことが絶えない、皆此筐から出たのであります。さう云ふ風の話になつて居る。

人間の運命は頼み難い、幸運は果敢ない實に安心ならぬものである、滿れば缺けるといふことは何處の國でも普通の考でありまして、支那の揚雄といふ人の書いた解嘲といふ文章の中にも、高明の家は鬼其室

を厭ふといふことがあります、人間が餘り富貴榮華を極めると必ず鬼
神が嫉んで罰を加へ災を加へるといふ、是はモウ普通の考てあります
が、希臘では此考が非常に極端に進んで居る。詰り人間に何か運の善
いことがあると、必ず神が嫉む、人間の方に過失が有つても無くても、必
ず神は人間の幸福を嫌ふといふ考てあります。要するに希臘の考て
は神と人間は利害が一致しないのであります。

それから印度の神話は頗る幼稚な單純な神話でありますが、其神話
に於きましては神は人類の保護神である、ブラハマン民族の祭祀儀式
を保護する者である、といふ外に別の性質はありません。

日本神話に於ては、神と人類といふやうなさう云ふ廣い考は無、人
類は悉く日本民族と見てあるので、日本神話は日本民族以外の民族を
認めない、日本民族は世界の人類で、其世界の人類を保護する爲に神が

ある神があつてそれから後に國家が生じ國家があつて、それから人類
が起ると云つたやうな譯で、日本の神話を貫いてゐるのは國家主義で
あります。皇室といふものがその國家的人文の中心にあつて、其中心
から發展して行くといふ思想であります、此思想は今日でも同じこ
とであります。さう言ふと、今日の日本にはそんな考は無いと云ふ人
があるかも知れませぬが、實際確かにある。其證據にはどの國民の歴
史を見ても、必ず或時代には宗教の迫害といふものがあります、必ず宗
教上から人民に迫害を加へて居る、國家が或宗教を採用して其他の宗
教を尤に迫害する。處が日本に於ては三千年來未だ嘗て宗教に迫害
を興へたことがない、他まで宗教の自由を許して居る、如何なる宗教が
這入つても決して國家は之に迫害を加へない。唯徳川時代に於ては、
幕府が一時外教を禁じましたけれど、其、アムは宗教上からの理由では無

くて政治上から來たものであります。それならば今でもあります、今でも「モルモン」宗旨は不可いから禁止するとか、天理教の一派は甚だ怪しからんと云つて禁ずるとか云ふことがありますけれども、其信仰上からして此宗教は神の道に背いて居るから禁ずるといふやうなことは無い。何故無いかといふと、日本には其必要が無いのであります。

日本民族は凡ての宗教以上に、一つの宗教を特つて居る、所謂神道が其であります。神道と申しましても内務省で取締つて居るやうなものではありません、日本の國家に始めから有る神道であります。詰り皇室が人民の中心であり祖先であるといふことが、日本國家の宗教であります。如何なる宗教が日本に這入つても其を採用し、その良い處を採つて文明を助ける、何でもかでも採る、どんな宗教が這入つても、日本の原始以來の國家中心の外に在るのでありますから心配はない。

昔から佛教は盛んであつたけれども皇室には這入らぬ、個人として佛法に歸依せられた天皇はありますけれども、國家の元首としては何時も神道の擁護者でありました。或點からいふと日本人は宗教心に薄い、日本人の宗教に冷淡であるといふのは、其國家といふことの考が強いからであります。日本には國家教といふものがあります。今日の日本人中で或人は佛教を信じ或人は耶蘇教を信じて居る、併し何を信じて居つても日本人は無意識に國家教を信じて居るから、戦争に行つて死んだ者があると神道で葬式をする、それから國葬も神葬である、唯一人不平を言つた者が無い、喜んで其葬式を受けて居る。又今日の教育勅語に付て彼是申すのは畏れ多いことでありますけれども、吾々日本人は如何なる宗教を信じてゐても必ず勅語を奉戴して居る。それには皇祖皇宗の遺訓といふことがあります。詰り日本の國家教とい

ふものは皇祖皇宗の道であるといふことになつて居ります。日本の國民道徳が其通りて、人間の道とか、上帝の教とか倫理とか道徳とか宗教とか云ふやうなことを説かないで、直ちに皇祖皇宗の遺訓としてあるところが、即ち歐羅巴人には分らないこととて、遺傳による外に説明の途がありません。外國の國民は太古の時代には日本人同様に自然教を信じて居たのでありますが、其後佛教が起ると純然たる佛教を信じ、耶蘇教が這入ると耶蘇教を信ずる、今則ち歐羅巴の國家は表面上基督教國で戴冠式さへ宗教をやつて居る、暹羅の皇室は佛教をやつて居る、諸り自分の宗教、祖先以來の宗教を捨て、或宗教を信じて居るのであります。日本ではさうで無い、今日に至るまで神道をやつてをります。

✓日本の國民は或點から言へば宗教に冷淡であると言つて宜い、其證據には罪といふことの考が違つてゐます。日本神話に於ては今日我

々が見るやうな罪は無い、罪といふのは穢れてあります。穢れが罪である、其罪は穢ひをすれば必ず淨くなるといふ極く簡單な考であります。其事は延喜式に大祓の祝詞がありまして、其中に罪を列べてあります。それには天罪、國罪といふ風に別けてありまして、天罪といふのは素盞鳴尊が天上に於てなされた悪事でありまして、即ち田の畔を毀ちたり、種蒔を妨げたり、天照大神が天の神を祭られる儀式の邪魔をしたり、御祭に神に捧げる著物を織る處の服屋の頂を穿ちて天斑駒を刺いて之に投込んだりする罪で、凡て祭の儀式を妨げる罪であります、つまり神事の穢れてあります。それから國罪の方は澤山列べてあります、が、要するに矢張り穢れて神官、其他國家の祭事に従事する所の人の穢れてあります。其以外には日本の神話に罪は無い。右の罪は一つの儀式即ち御稜をすれば、悉く消えて了ひ残らぬといふ考であります。

所が歐羅巴の神話ではさうぢや無い、非常に罪が重い、又永久に滅びぬものとしてあります。耶蘇教の神話に於きましてもアダム、イブの二人が最初エデンの樂園に居つた、其時分に神が御前方は勝手に遊んで宜いけれ共、唯一つ茲に生命の木がある、其木の實だけは食つてはいかぬと申つけて置きました、其木は林檎の木であります。所が蛇が欺いて曰ふには、お前は何故其木の實を食はないかと申しますと、イブが神様がアレを食うては不可いと云つて、嚴に禁じてあるから食はない。蛇が曰ふのに、それは可笑しい話だ、アレを食つたら眼も見える、知慧も出る、早く食つたら宜からう。そこでアダム、イブ夫婦が林檎を食べると、忽ち眼が見え知慧が附いて來た、是が文明の起りてあります。併しながら其罪によつて我々人類は今日まで罪がある、此が遺傳の罪と云ふ、非常に深酷な考であります。

それからまた希臘の神話に於ても罪が大變に恐ろしい、何時までも人間に附纏ふものである。例へば人を殺したら、其罪は其殺した者の子孫までも祟るといふことに成つてゐます。希臘のオリムピヤでは一番上にジュピターといふ神がありまして、其下に十二の神を率ゐて一つの神界を作つて居る。所が其ジュピターが其神界を組織する前に、まだ神がありました。其ジュピターの前の主宰神はクロノスで、其親はウラノスであります。所が其クロノスが親なるウラノスを殺して、自分が其跡に代つた。其殺した血が地面に落ちて、その血から出來た神が復讐の神、非常に恐ろしい神であります。かやうに人を殺すと云ふことは非常に恐ろしい事で、永久に其罪は滅びないといふ考がある。又耶蘇教の神話にもアダムの子のカインとアベルが兄弟喧嘩をして、カインがアベルを殺して、其罪に依つて永久に其子孫が災を受けると

いふことがあります。詰り罪といふ考が向うては大變深い。日本の神話に於ては、さう云ふ考は毛頭無い。唯罪といふのは穢れてある、穢れといふのは神を祭る儀式に大變悪いことである。併しそれは祓ひさへすれば忽ちに悉く消えて了ふといふ、極く單純な思想であります。それから國家と神との關係を申しますと、印度民族の神話では、國家と神との關係と云ふ考が極く薄い、薄いから今では滅びて居ります。印度神話には澤山の神があるが、何の神も一つの場所に於ては、最大最上の神で、此神を拜む時には此神の外には神は無いと云つたやうに、神と神との間に連絡も統一もない。そして神といふものは單に人類の保護者である、ブラハマン民族といふ貴族の宗教の保護神であるといふ考で、別に國家といふ考は無い。

それから北歐の神話でありますが、是は時代が極く新しい、そして其

半分以上は耶蘇教と希臘神話の眞似てありますから甚だ信用し難い譯であります。其神話に於きましても國家といふ考はありません、其神話は同民族全體に通ずる所の神であります。所が獨逸人は澤山に分れて居つて全體の國家をなして居ない、今日の英吉利人、和蘭人、獨逸人皆同じ民族である、其民族全體の神であるから民族の上に超然たる譯になる、國家の上に超然たる譯であります。今度は希臘に於きましても希臘民族は澤山の國家をなして居る方々の國がある、其國の上に神が在る、其神は自分丈けて別に國を作つて居る、だから或場合には自分の勝手で人間の國を滅ぼしたり起したりする。

所が日本にては、人類が即ち國家である、その以外には何も無い。總てのことは何時でも一番高い神、天照大神の勅命に依つて生ずることに成つて居る。先づ天神の命に依つて伊佐那岐、伊佐那美の二神が此

國を造られて、それから此國を支配する神を産まれる。天孫降臨の章には此豊葦原の水穂國は我が御子、天忍穗耳命の治め玉ふ可き國なりと云ふ天照大神の勅命があります。神武天皇の東征の時にも神勅があり、三韓征伐の時も矢張り天神の勅命があります。此の如く總て日本國家は天神が保護されて居るのみならず、日本の神と人間の間は何の争ひも無い、詰り國家保護の爲に神があるのであります、随つて之に對する祭りといふものも延喜式などを見ましても先づ第一に祈年祭がある、是は土地を守護し其土地に穀物の出来る様に祈るのであります、その次は大殿祭、其から御門祭、其他色々の祭がありますけれども、其目的はすべて君が代の長久を祈るので、凡ての神は皇室の神であります。皇室を護るのは國家を護り、人民を護る所以である、さう云ふ考が日本の神話には深く這入つて居ります。

それから最後に日本神話の成分を申しますと甚だ複雑であります。印度の神話は極く單純で、純粹の印度民族の神話であります、日本の神話は希臘の神話と同じく、随分色々の分子を含んで居る。含んで居るに拘らず、その多くの分子が悉く同化されて居る。希臘民族は自己以外の文明を探つてそれを調和するといふことはしても、それを悉く同化するといふことは出来なかつたらしい。日本民族は様々な外部の文明を探つて、それを悉く自分のものに同化して居る。古事記の神話を片端から調べて見ますと、純粹の日本の起原であると思はれるものは十の半にも達しない、其餘は悉く支那、南洋、印度、歐羅巴と方々の分子が這入つて居る。併しそんな澤山の分子が這入つても、悉く是が日本化されて皆日本のものになつて居る。でありますから日本書紀なども、純然たる日本の神代史であるとは思はれません。歴史ばかりで

なく凡ての方面がさうであります。制度、法律、文學、技藝何ても外國の文明を採用して居る。併しながら是は單に眞似をしたといふのではありません。非常に外國の分子が這入つて居るけれ共、能くそれを同化して居る。日本の中古、平安朝時代の文化がさうである。唐の文明を採つて居るけれ共、單に眞似をしたばかりぢや無い、大に同化してゐる。それから日本の言語を見ても、其文法は純粹の日本文法だけ共、其單語はまだ分らない。滿洲の言語を研究した人は總て滿洲の單語に似て居ると云ふ。西洋の國者で、日本の言語は希臘語であると云つてゐる者もある。其と云ふのも、日本の中にはあらゆる世界中の分子が這入つて居るからであります。

それと同じ様に日本の民族も、あらゆる民族を含んで居る、日本國民中には世界各國各種の民族の血が這入つて居るかも知れないけれ共、

矢張り日本人は日本人である、どんなものが西洋から輸入されても差支ない、ドシ／＼同化して了ふ度量が大切である。千年前の日本人は今日よりも餘程度量が大きかつた。今の日本人は朝鮮を取つた、滿洲を取つたと云ふて威張つて居る癖に、随分度量の狭いことを云つてゐる。古代の日本人は滿洲人でも支那人でも皆同化して、あらゆる文明を採用して發展した。是が日本民族の特性である。今日は尙更どんなものが這入つても心配は無い、どんなものでも採るけれ共、皆同化して消化して了ふといふ考を持つて居なければなりません。小さいことを云ふ人達は、日本の歴史を知らぬから、そんな間違つた考を起すだらうと思ひます。

此話の主意はそんなものでありまして、詰り日本の神話といふものには首尾一貫した思想がある、それは國家思想である、日本の國家的宗

教は神道^道である、西洋からどんなものが来ても、狼狽したりびくびくしたりする必要はない、ドシト征服して同化するのが日本民族の特性である、従て日本民族の將來の發展は其方面から其方針を定むべきである。そのことは日本神話の中にちやんと現はれて居るのであります。また色々話もありますけれども、最う時間がございませぬから、後は他日に譲つて此で御免を蒙ります。

日本建國神話終

明治四十五年參月拾參日印刷
 明治四十五年參月拾七日發行

定價七拾五錢

不許

日本建國神話

複製

著作者 高木敏雄

發行者 大葉久吉

發行者 吉岡平助

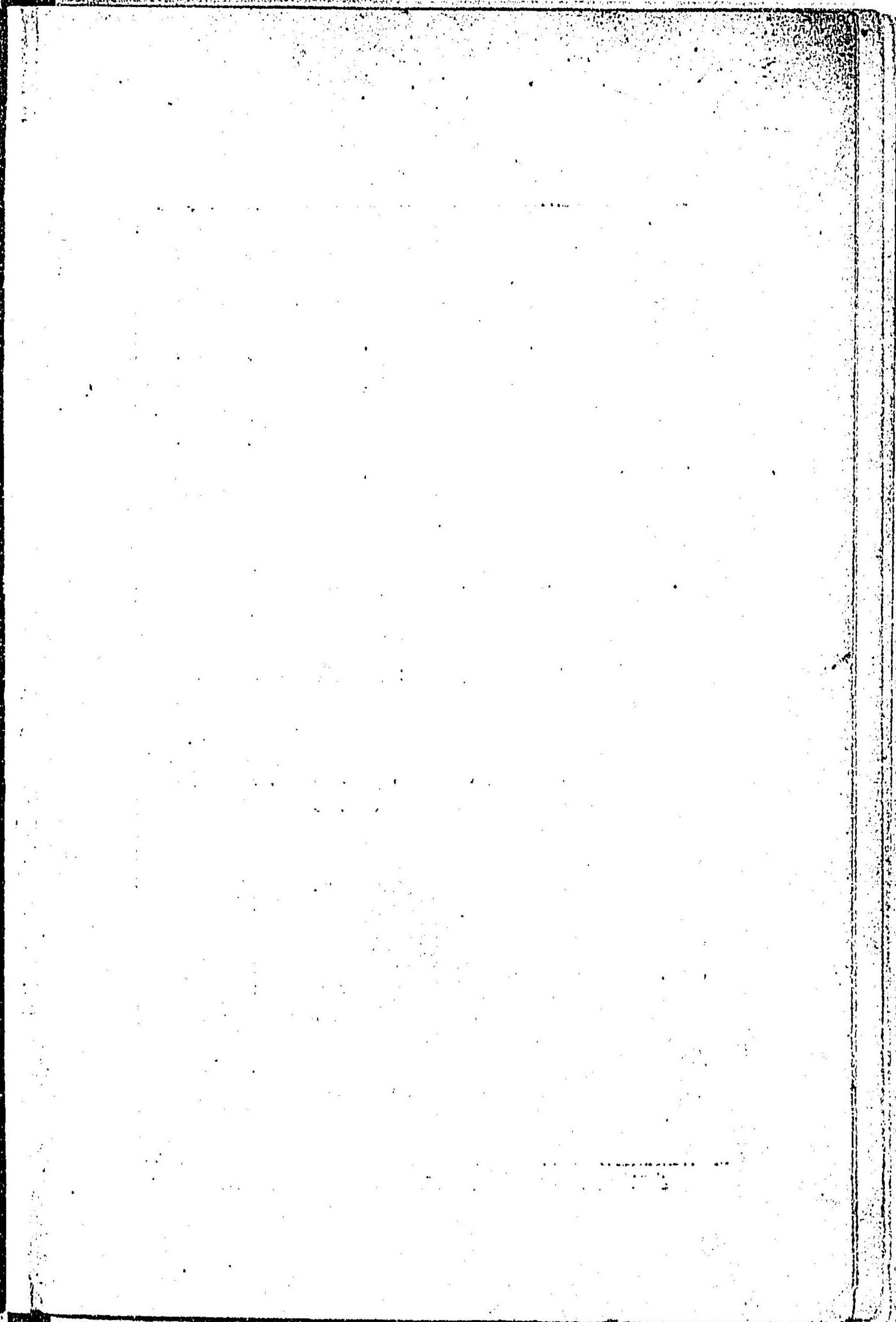
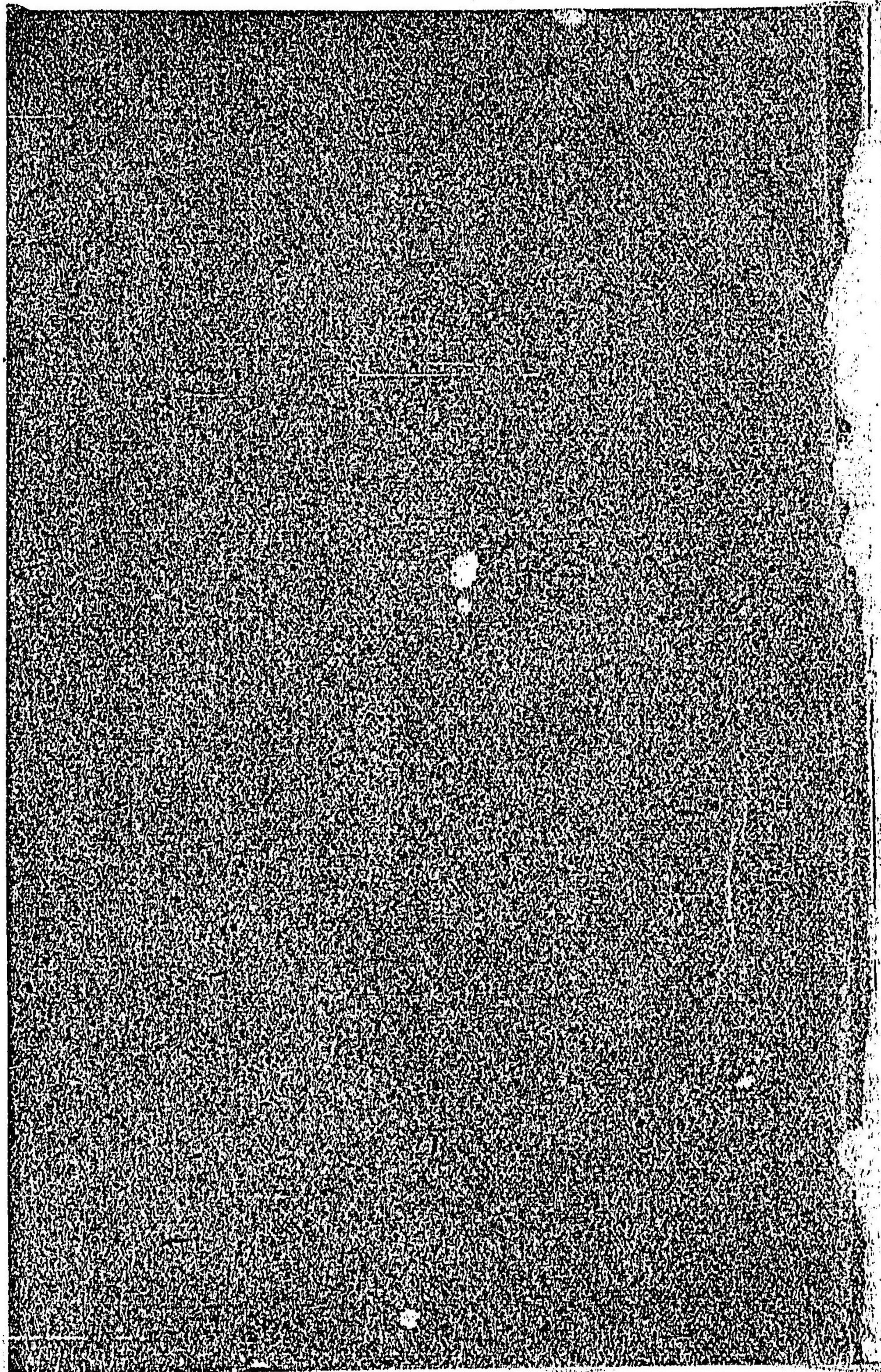
印刷者 飯田三千太郎

東京市日本橋區本石町三丁目十七番地
 大阪府東區備後町四丁目三十七番地
 東京市牛込市谷加賀町一丁目十二番地

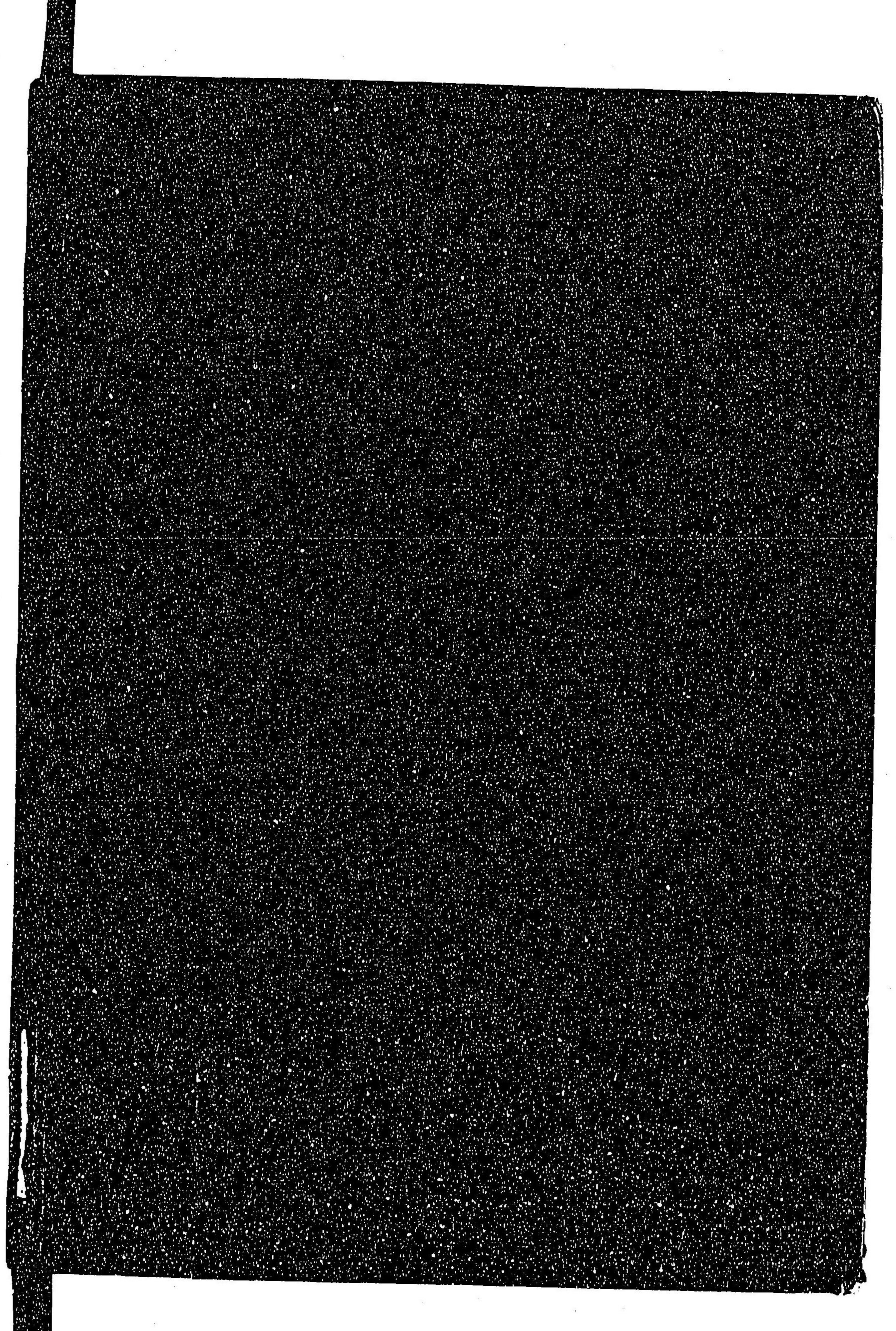
發兌

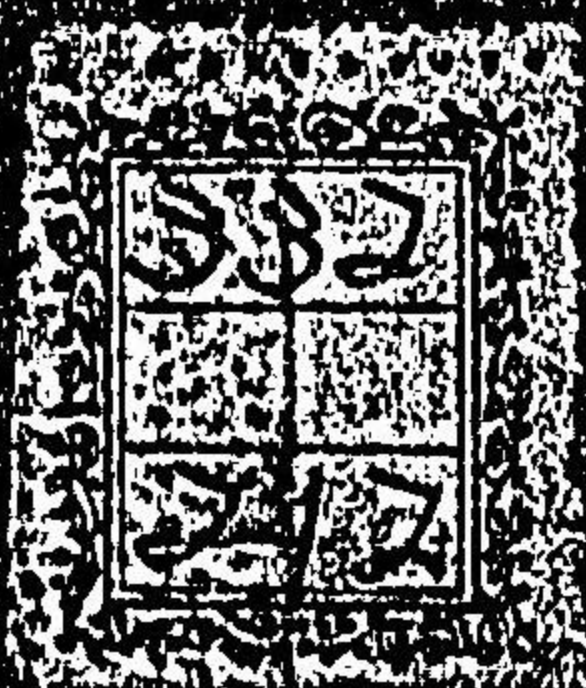
東京市日本橋區本石町
 大阪府東區備後町

寶文館



332
242





014501-000-5

332-242

日本建国神話

高木 敏雄 / 著

M45

ABB-0879

